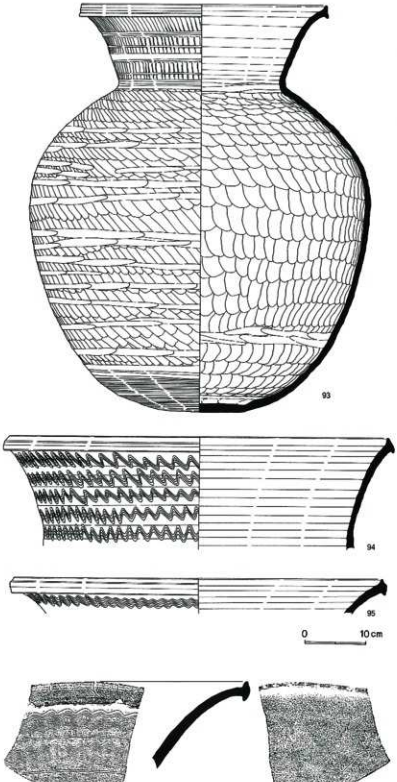
第375図　第217号住居跡出土遺物（4）



書土器である。文字は判読できない。41は底部、48・50・53・54は高台、52は口縁部、57・58は高台と底部が欠損している。39は黒色の付着物が体部に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。45は黒色の付着物が体部内面に確認できる。漆の痕跡と考えられる。

61から68は、灰釉陶器の高台付椀である。69から74は、灰釉陶器の高台付皿である。71は底部外面に墨書「南」がみられる。75は、灰釉陶器の耳皿である。66から68は口縁部、75は耳が欠損している。74は底部のみである。

76は、須恵器（HS）の蓋である。紐のみである。

77は、黒色土器の高台付椀である。口縁部と底部が欠損している。

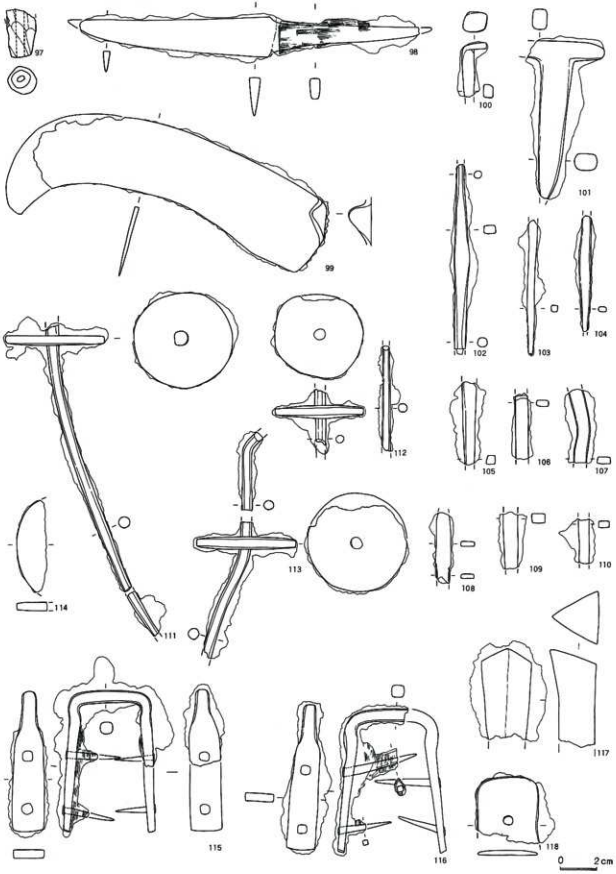
78は、緑釉陶器の高台付椀である。底部破片である。

79から87は、土師器の甕である。88は、須恵器（NS）の甑である。79から82・88は胴部中位以下、83・84は胴部下位以下、85は脚部、87は胴部中位以上と脚部が欠損している。86は底部のみである。

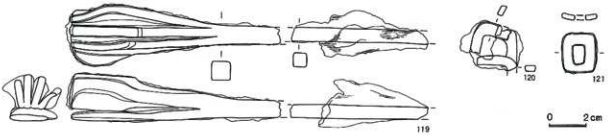
89は、須恵器（S）の甕である。90は、須恵器（NS）の甕である。91は、須恵器（S）の長頸壺である。92は、灰釉陶器の小瓶である。93から96は、須恵器（S）の大甕である。90は胴部上位以上と底部が欠損している。91・94は口縁部のみである。95・96は口縁部破片である。

97は、土錘である。

第376図　第217号住居跡出土遺物（5）



第377図　第217号住居跡出土遺物（6）



第320表　第217号住居跡出土遺物観察表（4）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪郭	色調	残存	出土位置その他
59	高台付皿	NS	13.0	2.8		6.4	B, I	良好	L	褐灰	70	P－23
60	高台付皿	HS	12.9	3.0		7.0	B, C	良好	R	浅黄橙		底－100。他－20
61	高台付椀	K	15.5	5.0		7.4	B, D	良好	R	灰白	90	炭下。P－23
62	高台付椀	K	17.7	5.7		7.9	B	良好	R	灰白	30	炭上
63	高台付椀	K	14.0	4.9		7.0	B	良好	R	灰白	90	貯穴フク土
64	高台付椀	K	12.8	4.1		6.0	B, D	良好		淡灰	100	P－23
65	高台付椀	K	19.5	6.4		9.6	D	良好		淡緑灰	90	P－23
66	高台付椀	K				6.4	B	良好	R	灰白	20	炭下
67	高台付椀	K				6.8	B, D	良好	R	灰白	20	炭上
68	高台付椀	K				8.0	B, D	良好	R	灰白	10	ベルト内
69	高台付皿	K	14.0	3.3		6.6	B, D	良好	R	淡黄	60	炭化物層上。ベルト内
70	高台付皿	K	15.2	2.8		7.4	B	良好	R	灰白	25	炭上
71	高台付皿	K	14.8	2.7		6.5	B, D	良好	R	灰白	60	炭下
72	高台付皿	K	14.7	2.5		6.6	D	良好		灰色がかった濃い黄緑	100	P－23
73	高台付皿	K	14.7	2.4		6.4	D	良好		淡灰	100	P－23
74	高台付皿	K				4.3	B	良好	R	灰白。オリーブ黄（釉）	5	炭下
75	耳皿	K				4.2	B	良好	R	灰白	5	炭下
76	蓋	HS					B, E, I	普通		橙	5	
77	高台付椀	黒色	19.5				B, D	良好	R	浅黄橙	10	
78	高台付椀	M					B	普通		淡緑	5	
79	甕 A Ⅲ b	H	20.8				B, H	良好		橙	20	カマド
80	甕 A Ⅲ b	H	19.4				B, E	良好		橙	25	カマド
81	甕 B Ⅲ c	H	19.8				B, E	良好		外－灰。内－灰黄	60	カマド
82	甕 A Ⅲ b	H	17.3				B, H	良好		褐灰	25	カマド
83	甕 B Ⅲ b	H	11.7				B, C, E	普通		褐灰	15	カマド
84	台付甕	H	11.3				B, E, H	良好		橙	25	
85	台付甕	H	9.5				B, H	良好		にぶい橙	70	P－23
86	甕底部	H				3.6	B, E	良好		褐灰	30	カマド
87	台付甕	H					B, E	良好		橙	30	
88	甑 A Ⅰ	NS	30.9		9.6		B, C, G	普通		灰白	15	
89	甕	S	26.2	42.6	15.3		B	良好		青灰	90	
90	甕	NS				12.0	B	良好		灰	50	カマド
91	長頸壺	S	10.9				B	良好（硬質）		青灰	20	炭下
92	小瓶	K	4.3	11.0		6.5	G	良好		濃緑灰	100	P－23
93	大甕	S	39.4	64.8		13.6		良好		淡灰	100	
94	大甕	S	40.1				B, G	普通		青灰	30	
95	大甕	S	38.6				B, G	普通		青灰	20	
96	大甕	S					B	普通		青灰	10	

98から121は、鉄製品である。98は刀子、99は鎌、100・103は釘、101は楔か、102と104から110は棒状鉄製品、111から113は紡錘車、114は紡錘車の車部破片、115・116は鐙金具、117は三角形の棒状鉄製品、118は延板状鉄製品、119は不明品だが、焼印の可能性もある。120は折れ曲がった棒状鉄製品、121は方形の金具である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第217号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第218号住居跡（第378図・第379図）

P－21、Q－21・22グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・区画溝などの遺構が比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.45m・短辺3.40m・深さ0.35mであった。住居跡の南西隅には、不整形の土壙を検出した。規模は、長径0.9m・短径0.79m・深さ0.12mであった。また、北西隅付近に径0.6m・深さ0.34mの小穴を検出した。

主軸方位は、N－100°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内へ短く延びていた。焚き口部の前面から燃焼部にかけて、楕円形に掘り込まれていた。燃焼部から煙道部へは、段をもって移行していた。煙道部は細長く、煙り出し部に向かって緩やかに傾斜していた。

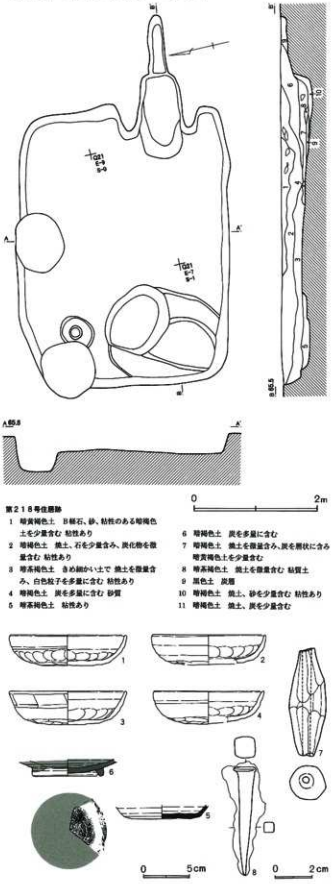
遺構の切り合い関係は、第55・56号掘立柱建物跡より古かった。

1から4は、土師器の坏AⅣである。2・4は底部が欠損している。

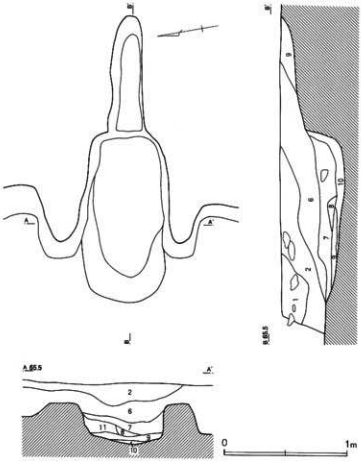
5は、須恵器（S）の椀である。底部のみである。

6は、灰釉陶器の高台付椀である。底部の

第378図　第218号住居跡・出土遺物



第379図　第218号住居跡カマド



みである。

7は、土錘である。

8は、鉄製品の釘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第218号竪穴式住居跡を中堀Ⅱ期に位置付けたい。

第219号住居跡（第380図・第381図）

Q－22・23グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・区画溝などの遺構が、比較的密集していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.50m・短辺3.45m・深さ0.10mであった。東壁を除き幅0.21mの壁溝を検出した。また住居跡の南壁寄りに、深さ0.1mほどの不整形の掘り込みを検出した。そのほか住居跡の北西隅と南西隅に径0.2m・深さ0.14mと、径0.25m・深さ0.16mの小穴を二基検出した。

主軸方位は、N－95°－Eであった。

第321表　第216号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
6	にぶい橙	80		0.7	0.3	0.8	C 2	Ⅲa	462	

第322表　第217号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
97	赤褐	20		1.5	0.4	4.3	C 1	Ⅰa	185	

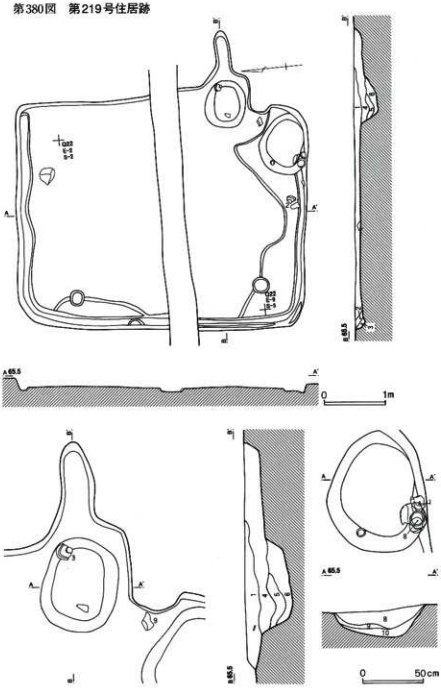
第323表　第218号住居跡出土遺物観察表

番号	器種		種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏	A Ⅳ	H	12.2	3.2		7.3	B, D, E, H	普通		こげ茶	90	
2	坏	A	H	12.0			7.5	B, E, H	普通		淡黄褐	20	
3	坏	A Ⅳ	H	12.3	3.5		6.6	B, D, E	普通		淡灰橙	90	
4	坏	A Ⅳ	H	11.7	3.5		7.4	B, D, E	普通		淡黄褐	40	
5	椀		S				6.3	B	良好	R	灰	5	カマド
6	高台付椀		K				7.0	B	良好	R	灰白	10	

第324表　第218号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
7	にぶい橙	100	5.7	1.9	0.3	17.5	C 1	Ⅰa	186	

第380図　第219号住居跡



第２１９号住居跡

1　暗褐色土　焼土を微量含み、暗黄褐色土を少量含む
2　暗褐色土　焼土を微量含む 粘性あり
3　暗褐色土　焼土、暗褐色土を少量含む 粘性あり
4　暗褐色土　焼土を多量に含み、粘性のある暗赤褐色土を少量含む
5　暗褐色土　砂を多量に含み、小石を少量含む
6　暗黄褐色土　暗茶褐色土、大形礫を少量含む
7　暗褐色土　焼土を微量含み、白色粒子を多量に含む 粘性あり
8　暗褐色土　焼土を微量含む 粘性あり
9　暗褐色土　焼土を微量に含む 砂質
10　暗褐色土　焼土、暗褐色土を少量含む 粘性あり

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、検出できなかったが、右袖にあたる部分が、住居跡の壁を利用し、これに対応して左袖が造り付けられた「片袖型」カマドと判断した。燃焼部の底面には、楕円形の深い掘り込みを検出した。覆土中に焼土・炭化物は含まず、カマドはこの掘り込みを埋めて、使用していたと推定した。燃焼部から煙道部の境は、段をもたず煙り出し部までほぼ水平であった。

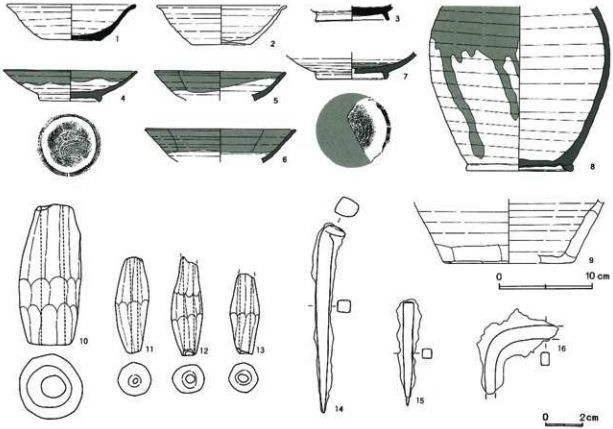
貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅に検出した。形状は、不正楕円形で規模は、長径0.95ｍ・短径0.74ｍ・深さ0.19ｍであった。

遺構の切り合い関係は、第28号区画溝より古く、第648号土壙より新しかった。

遺物は、カマド燃焼部内から須恵器の高台付椀（3）、カマド右脇から須恵器の壺（9）、貯蔵穴内から須恵器の坏(1)、灰釉陶器の長頸壺（8）が出土した。

1は、須恵器（S）の椀である。2は、須恵器（HS）の椀である。3

第381図　第219号住居跡出土遺物



は、須恵器（S）の高台付椀である。3は底部のみである。

4は、灰釉陶器の高台付皿である。5から7は、灰釉陶器の高台付椀である。5・6は底部、7は口縁部が欠損している。

8は、灰釉陶器の長頸壺である。9は、須恵器（NS）の甕である。8は胴部上位以上が欠損している。9は底部のみである。

10から13は、土錘である。

14から16は、鉄製品である。14・15は釘、16は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第219号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第220号住居跡（第382図・第383図・第384図）

Q・R－23グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙が比較的密集していたが、覆土上面に多量の焼土、炭化物が堆積していたため、確認は比較的容易であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.56m・短辺3.00m・深さ0.15であった。幅0.25mの壁溝が全周していた。壁溝内から、ほぼ等間隔に径0.08m・深さ0.05m前後の小穴を検出した。

住居跡の西壁やや南寄りに、円形の土壙を検出した。規模は、径0.91m・深さ0.15mであった。覆土に焼土・炭化物を多量に含んでいた。

主軸方位は、N－93°－Eであった。

カマドは、東壁のほぼ中央に検出した。袖は検出できなかったが、燃焼部の位置から、住居跡内に短く延びていたと推定したい。燃焼部は、奥に向かって緩やかに傾斜していた。

遺構の切り合い関係は、第223号住居跡と接してい

たが、重複関係は判然としなかった。

遺物は、住居跡の北側に集中していた。とくに土師器の坏（1・2・3・12・19・20・25・29・30・31）、須恵器の坏（35）・高台付椀（37・42・43・45）・皿（48）、灰釉陶器の高台付椀（51）などの食膳具が北西隅付近に集中する傾向があった。またカマドの右脇に須恵器の大甕（63）が出土した。

1から31は、土師器の坏である。1・2・9・10・14・19・20は、坏AⅣである。12は、坏AⅤである。30は、坏Bである。ほかは、坏AⅥである。4・7・

第325表　第219号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	椀	S	13.3	3.8		6.3	B, E	良好	R	灰白	75	貯穴
2	椀	HS	13.6	4.2		6.0	B, E, I	良好	R	にぶい橙	60	
3	高台付椀	S				8.2	B, G	良好	R	灰	10	カマド
4	高台付皿	K	14.0	3.2		6.2	B, D	良好	R	灰白		底部－100。他－25
5	高台付椀	K	13.8				B, D	良好	R	灰白	20	
6	高台付椀	K	15.9				B, D	良好	R	オリーブ灰	20	
7	高台付椀	K				7.0	B, D	良好	R	灰白	30	
8	長頸壺	K				11.1	D	良好		淡灰白	30	貯穴
9	大甕	NS				12.0	B	良好		灰白	20	カマド

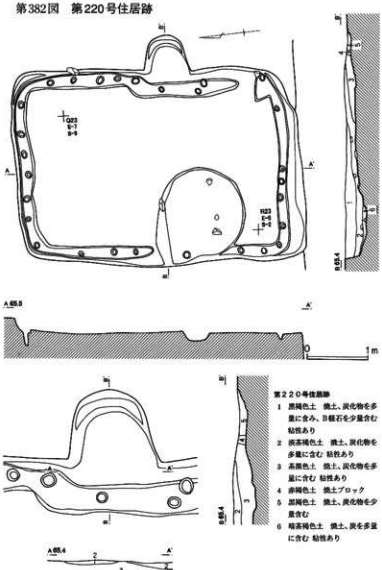
第326表　第219号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
10	にぶい橙	100	7.5	3.4	1.3	84.5	A 1	Ⅰb	17	
11	浅黄橙	100	5.1	1.3	0.3	14.4	C 1	Ⅰb	187	
12	にぶい橙	90		1.7	0.5	9.7	C 1	Ⅰc	188	
13	にぶい褐	70		1.5	0.6	6.9	C 1	Ⅱb	189	

第327表　第220号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.7	3.5		8.1	B, D, E	普通		淡黄橙	100	
2	坏 A Ⅳ	H	12.3	3.5		7.7	B, D, E, H	普通		淡橙	60	
3	坏 A Ⅵ	H	12.4	3.5		6.2	B, D, E	普通		明橙	100	
4	坏 A Ⅵ	H	12.6	3.5		6.6	B, D, E	普通		淡橙	90	
5	坏 A Ⅵ	H	12.0	3.7		6.8	B, D, E	普通		黄褐	90	
6	坏 A Ⅵ	H	12.1	3.6		6.4	B, E, H	普通		淡橙	100	
7	坏 A Ⅵ	H	13.0	3.6		7.4	B, D, E	普通		淡黄橙	50	
8	坏 A Ⅵ	H	12.9	3.3		6.8	B, E, H	不良		赤橙	100	
9	坏 A Ⅳ	H	11.8	3.0		7.2	B, E, H	普通		黄褐	30	
10	坏 A Ⅳ	H	12.7	3.5		8.2	B, E, H	普通		淡橙	80	
11	坏 A Ⅵ	H	13.0	3.5		7.5	B, D, E	普通		淡黄橙	90	
12	坏 A Ⅴ	H	12.5	3.4		6.2	B, D, E, H	普通		暗黄橙	90	
13	坏 A Ⅵ	H	12.6	3.4		6.5	B, D	普通		黄橙	80	
14	坏 A Ⅳ	H	12.6	3.5		7.2	B, D, E	普通		淡黄橙	50	
15	坏 A Ⅵ	H	12.3	3.0		7.0	B, E, HH	普通		黄橙	100	
16	坏 A Ⅵ	H	13.2	3.4		7.2	B, D, E	普通		淡黄橙	40	
17	坏 A Ⅵ	H	11.8	3.5		6.6	B, D, E	普通		黒褐	50	
18	坏 A Ⅵ	H	11.4	4.0		6.1	B, D, E	普通		橙	100	
19	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.6		7.5	B, D, E	普通		淡黄褐	70	
20	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.4		7.6	B, D, E	普通		淡橙	40	

第382図　第220号住居跡

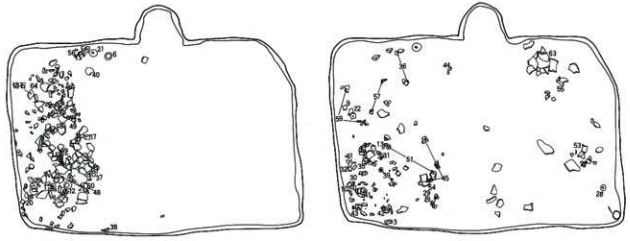


14・16・20・23・24・26・29・30・31は底部が欠損している。10・15は黒色の付着物が口縁部内面に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

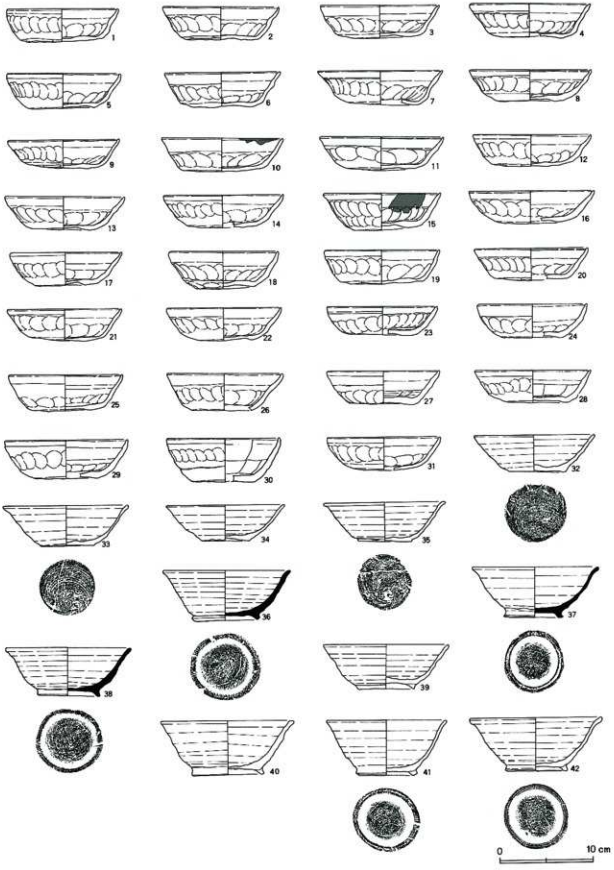
32から35は、須恵器（ＨＳ）の椀である。36から46は、高台付椀である。39から44は、須恵器（ＮＳ）である。44の底部外面には、墨書「十万」がみられる。他は、須恵器（ＨＳ）である。47は、須恵器（Ｓ）の皿である。48は、須恵器（ＨＳ）の皿である。49は、須恵器（ＮＳ）の高台付皿である。44は底部のみである。46・48は底部が欠損している。

50・51は、灰釉陶器の高台付椀である。52は、灰釉陶器の輪花付高台付椀である。52は底部が欠損している。

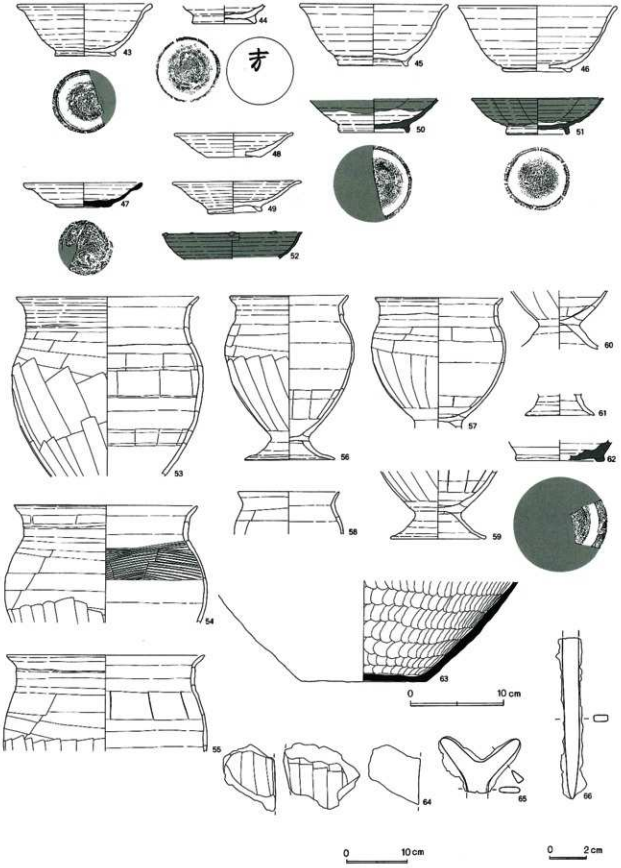
53から61は、土師器の甕である。53・54は胴部下位以下、55・58は胴部中位以下、57は脚部が欠損している。59から61は脚部のみである。



第383図　第220号住居跡出土遺物（1）



第384図　第220号住居跡出土遺物（2）



62は、灰釉陶器の長頸壺である。底部のみである。

63は、須恵器（S）の大甕である。胴部中位以上が欠損している。

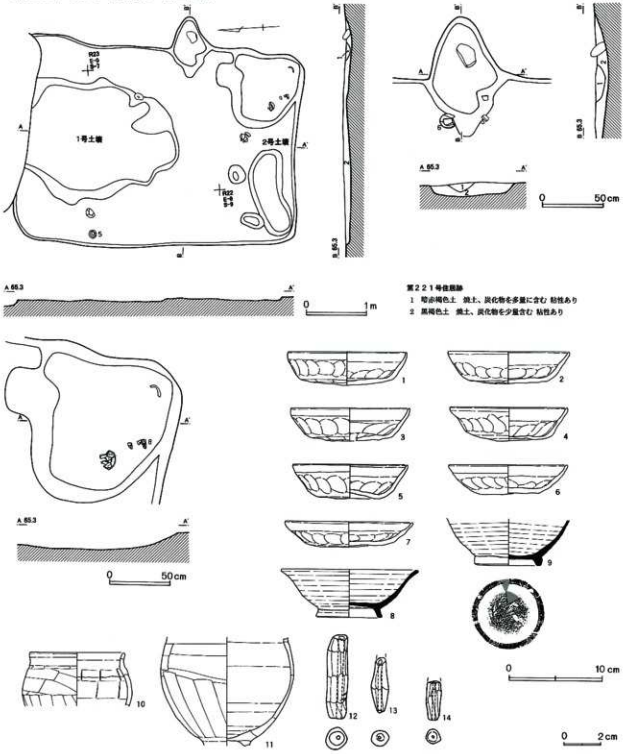
64は、凝灰岩の切石である。

65・66は、鉄製品である。65は鉄鏃、66は先端が尖る棒状鉄製品である。

第328表　第220号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	調整	色調	残存	出土位置その他
21	坏 A Ⅵ	H	12.0	3.4		7.5	B, D, E	普通		淡橙	50	
22	坏 A Ⅵ	H	12.1	3.5		6.0	B, D, E	普通		黄褐	90	
23	坏 A Ⅵ	H	11.6	3.0		7.0	B, D, E	普通		淡灰白	40	
24	坏 A Ⅵ	H	11.5	3.5		6.5	B, D, E, H	普通		淡茶	50	
25	坏 A Ⅵ	H	12.0	3.8		6.6	B, D, E	普通		淡黄褐	70	
26	坏 A Ⅵ	H	12.2	3.9		6.5	B, D, E	普通		暗橙	70	
27	坏 A Ⅵ	H	11.9	3.5		6.8	B, D, E	普通		淡黄褐	70	
28	坏 A Ⅵ	H	12.3	3.4		6.7	B, D, E	普通		赤褐	100	
29	坏 A Ⅵ	H	12.9	4.0		6.7	B, D, E, H	普通		淡黄褐	30	
30	坏 A Ⅵ	H	11.9	4.6		6.5	B, E, H	良好		淡黄橙	50	
31	坏 B	H	11.9	3.5		7.0	B, D, E	良好		黄橙	40	
32	椀	H S	12.7	3.9		6.0	B, E, I	良好	R	淡黄	90	
33	椀	H S	13.0	4.3		5.7	B, C, I	良好	R	にぶい橙	80	
34	椀	H S	12.4	3.8		5.1	B, E, G	普通	R	浅黄橙	50	
35	椀	H S	12.5	4.2		5.6	B, C, I	良好	R	黄灰	70	
36	高台付椀	S	13.2	5.3		6.5	B, C	良好	R	灰	95	
37	高台付椀	S	13.3	5.3		5.8	B	良好	R	褐灰	70	
38	高台付椀	S	13.0	5.1		6.3	B, C	良好	R	灰	95	
39	高台付椀	N S	13.0	4.7		6.0	B, E, I	普通	R	褐灰	60	
40	高台付椀	N S	13.7	5.8		7.2	B, D, E	良好	R	褐灰	95	
41	高台付椀	N S	12.6	5.9		5.8	B, E, G, I	良好	R	灰白	40	
42	高台付椀	N S	13.8	5.7		6.2	B, C	良好	R	灰白	50	
43	高台付椀	N S	13.9	5.5		6.1	B, D, G	良好	R	灰白	60	
44	高台付椀	N S				6.3	B, C, F, H	良好	R	灰白	20	
45	高台付椀	H S	15.5	6.5		7.2	B, E, I	普通	R	浅黄	70	
46	高台付椀	H S	16.7	7.0		7.0	B, C	良好	R	にぶい橙	30	
47	皿	S	12.5	2.6		5.9	B	良好	R	褐灰	90	
48	皿	H S	12.3	2.5		5.7	B, E, G, I	良好	R	にぶい黄橙	50	
49	高台付皿	N S	13.4	3.4		5.3	B, I	良好	R	黄灰	70	
50	高台付椀	K				7.2	B	良好	R	灰白	20	
51	高台付椀	K	13.8	3.9		6.2	B	良好	R	灰白。灰オリーブ（釉）	60	
52	梅花付高台付椀	K	14.8				B	良好	R	灰黄	5	
53	甕 A Ⅲ a	H	19.4				B, E, H	良好		にぶい橙	25	
54	甕 B Ⅱ c	H	19.4				B, C, E	普通		外－にぶい赤褐。内－浅黄橙		口縁－100。他－20
55	甕 B Ⅲ b	H	10.9				B, C, G, H	良好		外－にぶい橙。内－橙	15	
56	台付甕	H	12.5	17.4		9.4	B, H	良好		橙	90	
57	台付甕	H	13.5				B, E, H	良好		橙	90	
58	台付甕	H	10.7				B, H	良好		橙	30	
59	台付甕	H				9.9	B, C, E	良好		浅黄橙		脚－100。他－25
60	台付甕	H					B, E, H	良好		外－にぶい橙。内－橙	60	
61	台付甕	H				7.2	B, E, H	良好		にぶい橙	100	
62	長頸壺	K				9.1	B	良好	R	灰白	5	
63	大甕	S				12.4	B, F, G	普通		青灰	10	

第385図　第221号住居跡・出土遺物



以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第220号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第221号住居跡（第385図）

R・S－22・23グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙群などの遺構が密集し、確認にやや手間取った。

住居跡の北側は第222号住居跡が破壊したが、ほぼ全容を検出した。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.53m・短辺3.12m・深さは0.10mと非常に浅かった。住居跡の中央やや北側と南西隅に二基の土壙を検出した。第1号土壙は、第222号住居跡と重複した不整形土壙であった。残存した長径の長さは、2.45m・短径1.93m・深さ0.06mであった。

第2号土壙は、不正楕円形で規模は、長径1.38m・短径0.48m・深さ0.09mであった。第2号土壙に接して、小穴を二基検出した。

主軸方位は、N－95°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から、住居跡内に短く延びていたと推定した。燃焼部は、極く浅く不整形に窪んでいた。燃焼部の奥から川原石が出土したが、形状と位置から支脚と考えにくかった。

貯蔵穴は、カマドの右脇に検出した。形状は、不整形で規模は、長径1.31m・短径1.25m・深さ0.05mであった。

遺構の切り合い関係は、第222号住居跡より古かった。

遺物は、カマド内から土師器の坏（6）が、貯蔵穴内から須恵器の高台付椀（8）が、そして、住居跡の西壁やや北寄りの壁際から土師器の坏（5）が出土した。

1から6は、土師器の坏である。1は、坏AⅤである。2・3は、坏AⅣである。4から6は、坏AⅥである。7は、土師器の皿である。3は底部が欠損している。

8・9は、須恵器（S）の高台付椀である。9は口縁部が欠損している。

10・11は、土師器の甕である。10は胴部下位以下、11は口縁部と脚部が欠損している。

12から14は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第221号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第222号住居跡（第386図・第387図）

R・S－22・23グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙群などの遺構が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.83m・短辺3.40m・深さ0.13mであった。住居跡の北西隅から南西隅にかけて、幅0.24mの壁溝を検出し

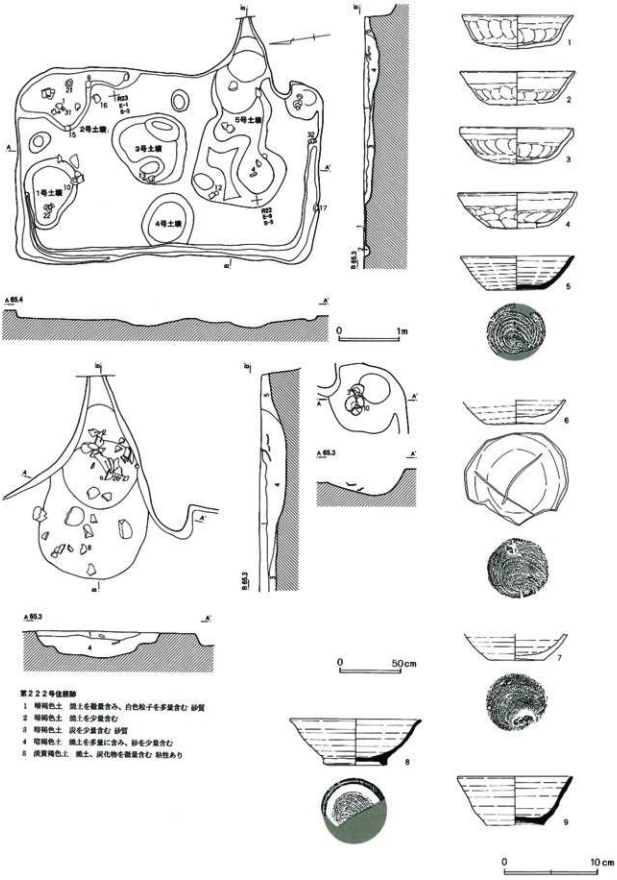
第329表　第221号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅴ	H	12.5	3.5		7.6	B, D, E, H	普通		淡橙	70	
2	坏 A Ⅳ	H	12.8	3.4		8.3	B, D, E	普通		淡黄橙	60	
3	坏 A Ⅳ	H	12.5	3.4		8.5	B, E, H	普通		黄橙	90	
4	坏 A Ⅵ	H	12.3	3.5		7.0	B, E, H	普通		黄褐	40	
5	坏 A Ⅵ	H	12.1	3.6		6.4	B, D, E	普通		黄橙	100	
6	坏 A Ⅵ	H	12.5	3.1		6.1	B, E, H	普通		淡橙	80	カマド
7	皿	H	13.4	2.7		7.5	B, D, E, H	普通		黄褐	80	
8	高台付椀	S	14.3	5.1		6.7	B, I	良好	R	灰褐	40	
9	高台付椀	S				6.5	B	良好	R	褐灰	50	
10	台付甕	H	9.9				B, E, H	良好		にぶい橙	25	
11	台付甕	H					B, C, E	良好		橙	20	

第330表　第221号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
12	にぶい橙	100	4.4	1.2	0.2	6.0	C 3	Ⅰa	646	
13	浅黄橙	90		0.9	0.1	1.4	C 2	Ⅰb	463	
14	にぶい橙	20		0.8	0.1	1.0	C 2	Ⅲa	464	

第386図　第222号住居跡・出土遺物（1）



第２２２号住居跡

1　暗褐色土　焼土を微量含み、白色粒子を多量含む 砂質
2　暗褐色土　焼土を少量含む
3　暗褐色土　炭を少量含む 砂質
4　暗褐色土　焼土を多量に含み、砂を少量含む
5　淡黄褐色土　焼土、炭化物を微量含む 粘性あり

た。

住居跡から五基の土壙を検出した。第1号土壙は、不正楕円形で長径1.13m・深さ0.13mであった。第2号土壙は、不整形で長径2.21m・深さ0.15mであった。第3号土壙は、不整形で長径1.19m・深さ0.1mで底面に小穴を二基検出した。第4号土壙は、円形で0.78m・深さ0.14mであった。第5号土壙は、不整形で長径2.02m・短径1.45m・深さ0.13mで底面は凹凸が激しかった。

第1号土壙と第2号土壙の間、そして第3号土壙の脇に、二基の小穴を検出した。

主軸方位は、N－103°－Eであった。

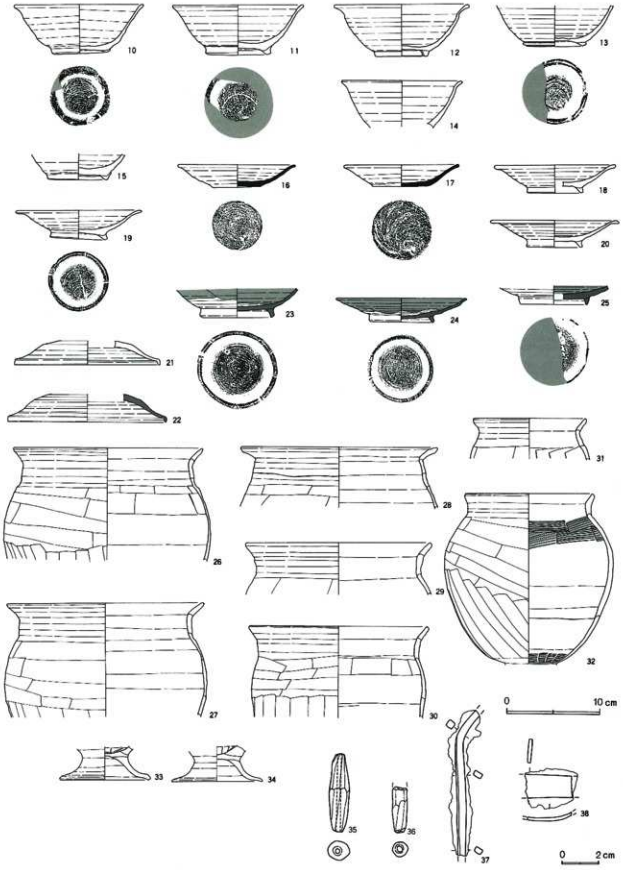
第331表　第222号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸輪	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.7	3.6		6.8	B, D, E	普通		淡黄橙	50	
2	坏 A Ⅵ	H	12.1	3.6		6.7	B, D, E, H	普通		黄橙	70	カマド
3	坏 A Ⅵ	H	11.9	3.8		7.0	B, D, E, H	普通		暗黄褐	60	貯穴
4	坏 A Ⅱ	H	12.5	3.9		6.4	B, E, H	良好		淡黄白	50	
5	椀	S	11.8	3.6		6.1	B	良好	R	灰	75	
6	椀	H S				5.1	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	20	
7	椀	H S				5.8	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	25	
8	高台付椀	S	13.8	4.9		6.0	B	良好	R	灰	30	カマド
9	高台付椀	S	12.1				B, E	普通	R	褐灰	30	
10	高台付椀	H S	13.5	5.2		5.3	B, E	良好	R	褐灰	90	貯穴
11	高台付椀	N S	13.7	5.3		6.2	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙。褐灰	60	
12	高台付椀	N S	14.1	5.5		5.3	B, C	良好	R	灰褐	30	
13	高台付椀	N S				5.9	B, E	普通	R	灰白	25	
14	高台付椀	H S	12.7				B, E, G	良好	R	橙	10	
15	高台付椀	N S				5.8	B, C, E, I	普通	R	灰白	20	
16	皿	S	12.3	2.4		5.2	B	良好	R	灰	80	
17	皿	S	12.0	2.3		6.0	B, D	良好	R	灰	70	
18	高台付皿	H S	12.8	3.0		5.4	B, E	普通	R	にぶい黄橙	25	
19	高台付皿	N S	13.0	3.0		5.6	B, E, G	良好	R	灰白	95	
20	高台付皿	H S	13.1	2.8		5.8	B, E	良好	不明瞭	橙	30	
21	蓋	N S	15.4	2.6		6.2	B, E	良好	R	灰白	10	
22	蓋	K	16.7	3.0			B	良好	R	灰白	5	カマド
23	高台付椀	K				7.3	B	良好	R	灰白。灰オリーブ（釉）	20	
24	高台付皿	K	13.7	2.6		6.5	B	良好	R	灰白	70	
25	高台付皿	K				7.1	B	良好	R	灰白	10	
26	甕 B Ⅱ a	H	20.0				B, E, H	良好		橙	25	カマド
27	甕 B Ⅱ a	H	20.8				B, E, H	良好		橙	20	カマド
28	甕 B Ⅲ a	H	20.9				B, E	良好		橙	20	
29	甕 B Ⅲ c	H	19.6				B, C, E	良好		橙	15	
30	甕 B Ⅳ c	H	19.0				B, G, H	良好		橙	15	
31	台付甕	H	11.8				B, E, H	良好		にぶい橙	15	
32	台付甕	H	13.4	18.0		5.5	B, E, H	良好		にぶい橙		口縁－5。他－60
33	台付甕	H				9.3	B, E, H	良好		橙	100	貯穴
34	台付甕	H				9.5	B, E, H	良好		橙	100	

第332表　第222号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
35	淡黄橙	100	4.2	1.2	0.3	3.6	C 2	Ⅰa	471	
36	橙	40				1.2	C 3	Ⅲa	647	

第387図　第222号住居跡出土遺物（2）



カマドは、東壁の南東寄りに検出した。左袖は、地山を掘り残して造り、非常に短く住居跡内に延びていた。右袖は、検出できなかったが、燃焼部と左袖の位置から、短く住居跡内に延びていたと判断した。焚き口部から燃焼部にかけては、楕円形にやや深く掘り込まれ、住居跡内の第5号土壙に連なっていた。燃焼部から煙道部へは段をもたず緩やかに傾斜しながら移行していた。煙道部は、第223号住居跡が破壊したが、細長く延びていたと推定した。

貯蔵穴は、カマドの右脇に検出した。形状は、円形で規模は、径0.46m・深さ0.21mと小形であった。

遺構の切り合い関係は、第223号住居跡より古く、第221号住居跡・第2土壙群より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀（8）、土師器の甕（26・27）が、貯蔵穴内から土師器の坏（3）、須恵器の高台付椀（10）が出土した。第2号土壙から土師器の坏（1）、須恵器の坏（6）・蓋（21）、土師器の甕（31）が、第1号土壙から須恵器の高台付椀（10・12）が、第3号土壙から須恵器の高台付椀（13）が、第5号土壙から土師器の坏（4）、須恵器の高台付椀（12）が出土した。

1から3は、土師器の坏AⅥである。4は、土師器の坏AⅡである。2は底部が欠損している。

5から7は、椀である。5は、須恵器（S）である。他は、須恵器（HS）である。8から15は、高台付椀である。8・9は、須恵器（S）である。10・14は、須恵器（HS）である。ほかは、須恵器（NS）である。16・17は、須恵器（S）の皿である。18から20は、高台付皿である。18・20は、須恵器（HS）である。19は、須恵器（NS）である。21は、須恵器（NS）の蓋である。4・14・18は底部、6・7・13は口縁部、21は天井部が欠損している。15は底部のみである。

22は、灰釉陶器の蓋である。23は、灰釉陶器の高台付椀である。24・25は、灰釉陶器の高台付皿である。22は天井部、25は口縁部が欠損している。

26から34は、土師器の甕である。26・27・30は胴部下位以下、28・29・31は胴部中位以下、32は底部が欠損している。33・34は脚部のみである。

35・36は、土錘である。

37・38は、鉄製品である。37は棒状鉄製品、38は延板状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第222号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第223号住居跡（第388図・第389図・第390図・第391図・第392図・第393図・第394図・第395図）

R－23・24グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙群などの遺構が比較的密集していたが、覆土上面に焼土・炭化物・火山灰を含む黒色土が堆積していたため、確認は容易であった。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺6.95m・短辺6.62、深さ0.60mと非常に大形の住居跡であった。住居跡の北西隅に幅0.25mの壁溝を検出した。また住居跡の西壁中央には、長さ1.5m・幅0.73m、床面からの高さ0.36mの階段状の施設を検出した。

柱穴は、4基が対角線上に整然と並んでいた。掘り方の規模は、径0.8m前後・深さ0.45m前後と大形で、径0.3m前後の柱痕跡も明瞭に確認できた。

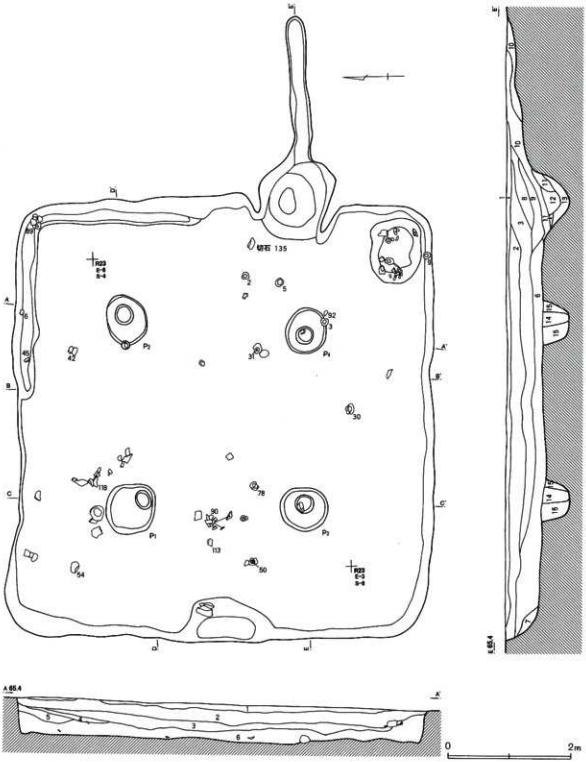
主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内に短く延びていた。右袖が、住居跡の中央方向へ延びていたため、焚き口部は、中央に向かって開いていた。燃焼部の底面は、非常に深く円形に掘り込まれていた。この掘り込みの覆土は、焼土・炭化物を多量に含みカマドの使用時には、掘り込まれた状態であったと推定した。

燃焼部から煙道部へは、大きな段をもって移行していた。煙道部は、確認しただけでも長さ2.35mと非常に細長い。底面には小さな凹凸がみられたが、煙り出し部に向かって緩やかに傾斜していた。

貯蔵穴は、カマドからやや離れた住居跡の南東隅に検出した。形状は、不正長方形で規模は、長径1.01m・短径0.81m・深さ0.09mと、住居跡の規模に比べて小さかった。

第388図　第223号住居跡（1）



第２２３号住居跡

1　黄褐色土　H軽石層

2　黒色土　焼土粒子、炭化物、土器片を多量に含む 粘性あり

3　赤茶褐色土　焼土、炭化物、土器片を多量に含む 粘性あり

4　赤褐色土　焼土層

5　茶黒色土　焼土、炭化粒子を多量に含む 粘性あり

6　灰黒色土　焼土、炭化物を少量含み、大形礫、土器片を多量に含む 軟質 砂質

7　淡橙色土　焼土、炭化物を少量含む 砂質

8　暗黒褐色土　焼土粒子、炭化物を多量に含む 粘性あり

9　暗赤褐色土　粘性あり 粘土層（天井部崩落土）

10　赤褐色土　焼土主体 炭化物を少量含む

11　黒色土　炭化物層

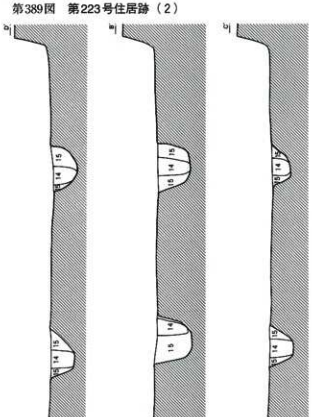
12　黒色土　炭化物主体 粘土を少量含む 粘性あり

13　赤褐色土　粘性あり

14　暗褐色土　炭化物を多量に含み、焼土を少量含む

15　暗黄褐色土　焼土、炭化物を少量含む

第389図　第223号住居跡（2）



遺構の切り合い関係は、第220・222号住居跡より新しかった。

遺物は、覆土中・床面などから多量に出土したが、カマド内から目立った遺物は出土していない。貯蔵穴内からは、土師器の坏（7・8）、須恵器の坏（28）・高台付椀（51・52・53）・甕（119）などがまとまって出土した。住居跡の中央やや西側の床面からは、須恵器の高台付椀（50・54）、灰釉陶器の高台付皿（78）、須恵器の長頸壺（113）・甕（118）が、住居跡の北東部から須恵器の坏（42・45）、土師器の甕（89）が、カマド前面から土師器の坏（2・3・5）、須恵器の坏（31）、土師器の甕（92）が出土した。

1から7、11から25は、土師器の坏である。1・3・5・7・11・13・15・16・18・22は、坏AⅥである。4・12・19から21・24は、坏AⅤである。他は、坏AⅥである。8から9、26・27は、土師器の皿である。6・10・17・18・23は底部が欠損している。9は口縁部内面、20は底部内面に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

28から47は、椀である。30・32・33は、須恵器（S）である。31・40・41・44は、須恵器（HS）である。47は、黒色土器である。48・49は、須恵器（S）の皿である。50から71は、高台付椀である。55から57は、須恵器（S）である。50・52・67は、須恵器（HS）である。他は、須恵器（NS）である。72から74は、高台付皿である。72・73は須恵器（HS）、74は須恵器（NS）である。56の底部内面には、墨書「□」がみられる。また64の底部外面には、墨書「□」がみられる。29・40・44・54・63・65は底部、46・52・53・57・64は口縁部、61・74は高台、70は口縁部と高台が欠損している。47は底部のみである。43・58は黒色の付着物が口縁部から底部にかけて確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

75から77は、黒色土器の椀である。77は底部が欠損している。

78は、灰釉陶器の輪花付高台付皿である。79は、灰釉陶器の高台付大椀である。80・81は、高台付椀である。82から84は、灰釉陶器の高台付皿である。86は、灰釉陶器の耳皿である。79は底部のみである。80は底部、81は口縁部、83・84は口縁部と底部が欠損している。

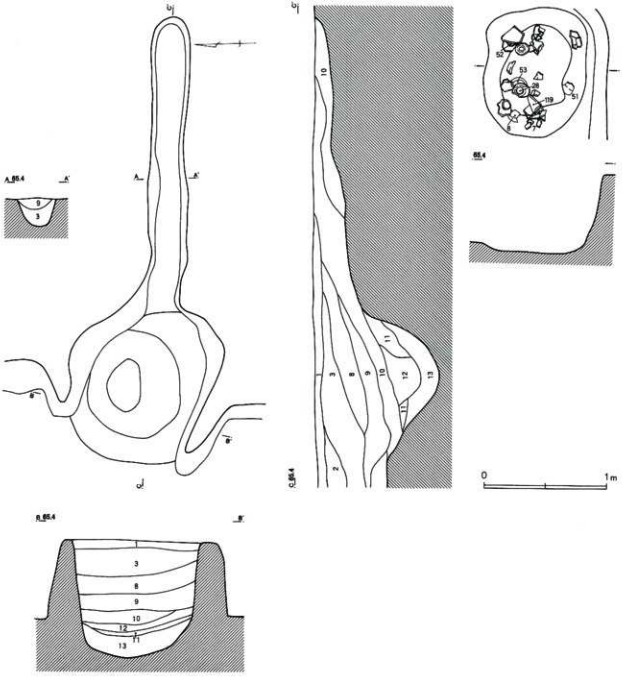
85は、須恵器（HS）の蓋である。紐のみである。

87・88は、緑釉陶器の高台付椀である。87は口縁部破片、88は底部破片である。

89から104は、土師器の甕である。89・90・95は胴部下位以下、91・92・94・96から99は胴部中位以下、93は胴部上位以下が欠損している。100は底部のみ、101から104は脚部のみである。

105は、須恵器（S）の壺である。106から115は、長頸瓶である。106から109・111は、須恵器（S）である。110・112・115は、灰釉陶器である。113・114は、

第390図　第223号住居跡カマド・貯蔵穴



須恵器（ＮＳ）である。105は口縁部と胴部下位以下が欠損している。106・107は底部のみ、108から110は口縁部のみ、111は頸部のみ、112は胴部下位のみ、113から115は底部のみである。

116から122は、須恵器（Ｓ）の大甕である。116から119は口縁部のみである。120から122は口縁部破片である。

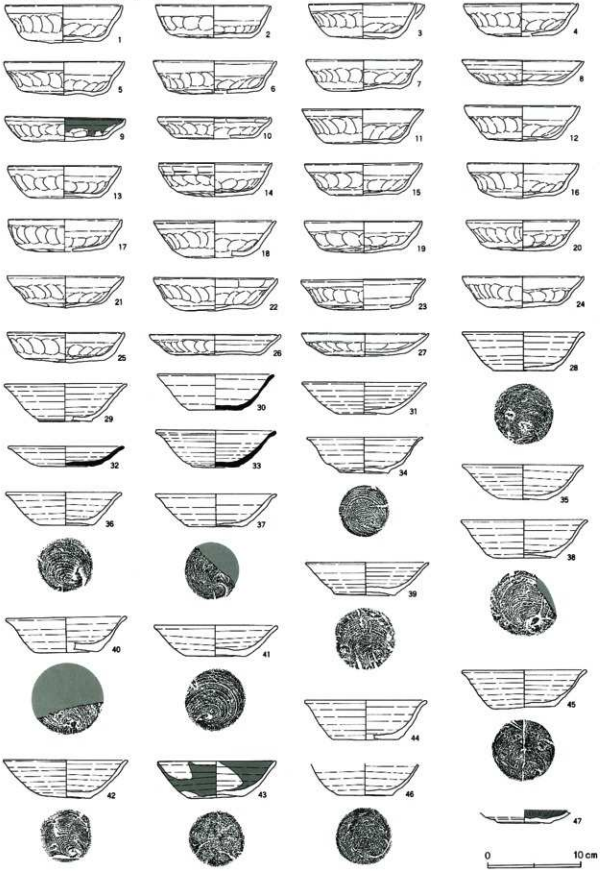
123から134は、土錘である。

135から137は、凝灰岩の切石である。

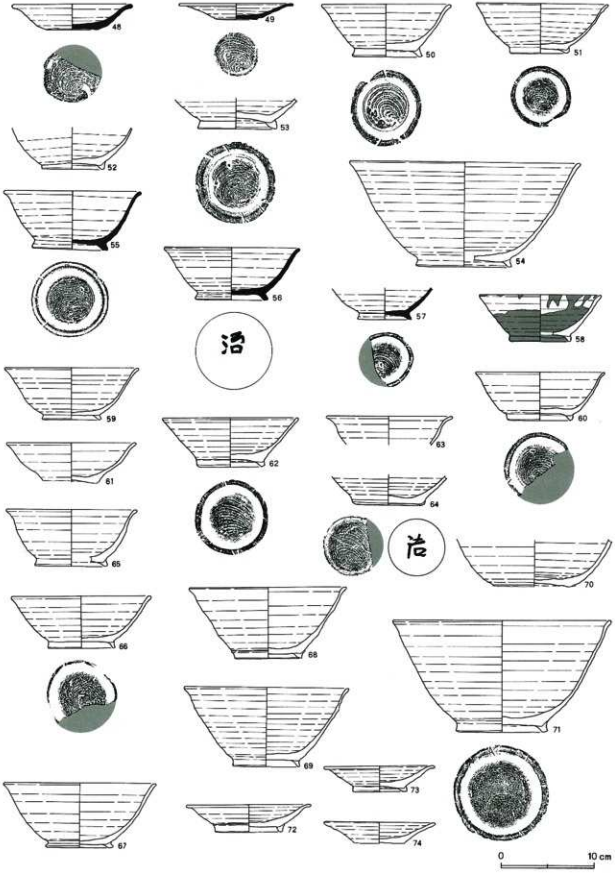
138から154は、鉄製品である。138・139は刀子、140から144は釘、145から153は棒状鉄製品であるが、146と148は釘の可能性がある。154は延板状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第223号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

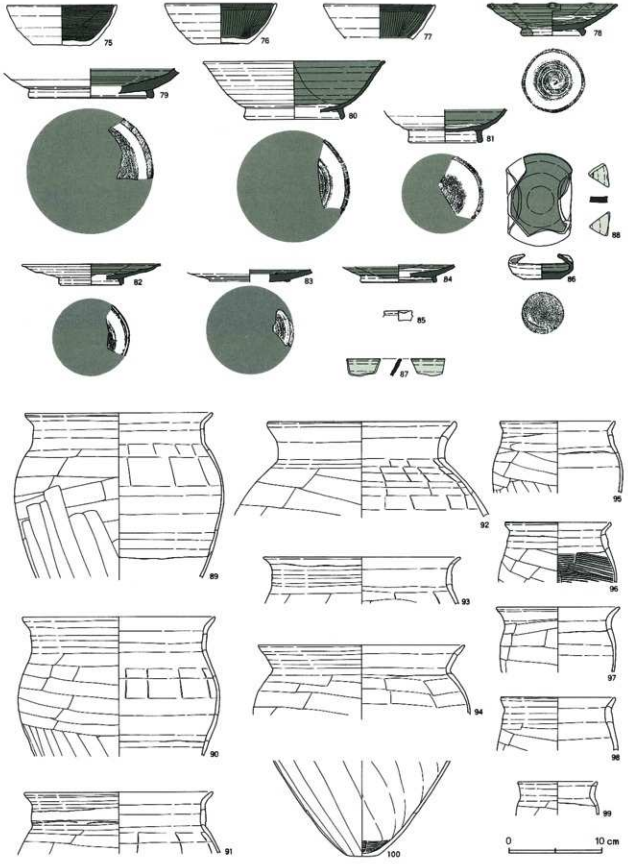
第391図　第223号住居跡出土遺物（1）



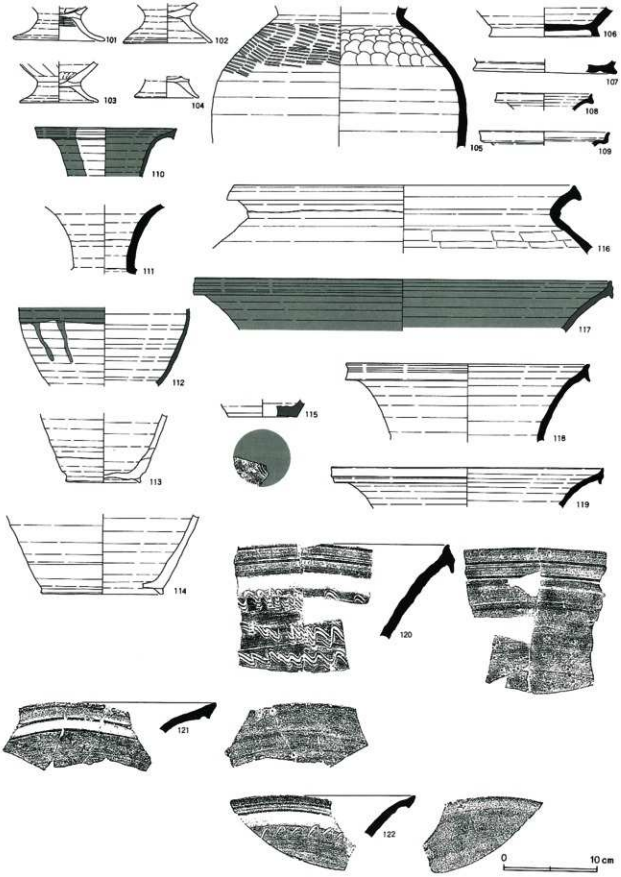
第392図　第223号住居跡出土遺物（2）



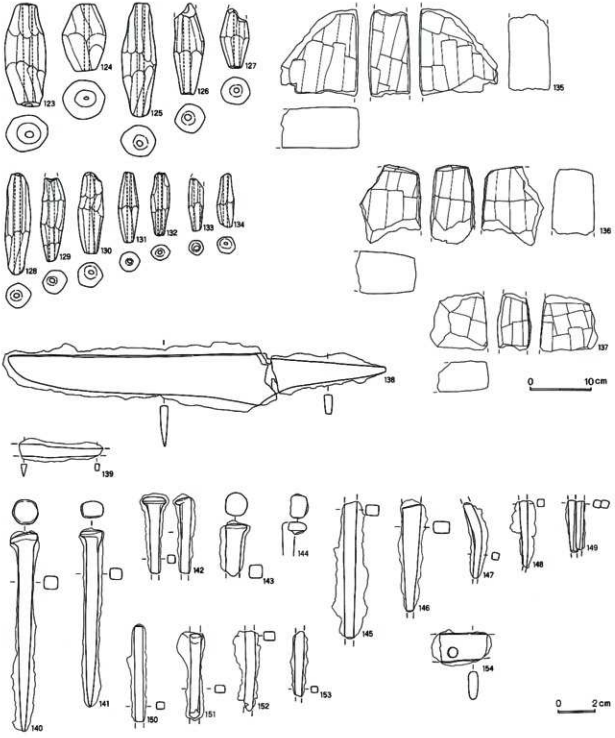
第393図　第223号住居跡出土遺物（3）



第394図　第223号住居跡出土遺物（4）



第395図　第223号住居跡出土遺物（5）



第333表　第223号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鐸	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	12.5	4.0		7.5	B, D, E, H	普通		黄橙	100	
2	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.5		8.6	B, D, E, H	普通		淡黄橙	100	
3	坏 A Ⅵ	H	11.4	3.7		7.0	B, D, E	普通		黄橙	90	
4	坏 A Ⅴ	H	12.0	3.5		6.5	B, D, E, H	普通		暗黄褐	80	
5	坏 A Ⅵ	H	12.7	3.6		8.4	B, D, E, H	普通		黄白	90	
6	坏 A Ⅳ	H	13.0	3.5		8.4	B, D, E, H	普通		黄褐	30	
7	坏 A Ⅵ	H	12.3	3.3		8.0	B, D, E, H	普通		淡黄褐	80	貯穴
8	皿	H	12.9	2.6		6.2	B, D, E	普通		黄褐	40	貯穴
9	皿	H	12.7	2.5		9.0	B, D, E, H	普通		橙	100	貯穴
10	皿	H	11.9	2.3		8.3	B, D, E	普通		淡黄橙	40	カマド内
11	坏 A Ⅵ	H	13.0	3.6		7.5	B, D, E	普通		黄褐	80	淡黒色土層中
12	坏 A Ⅴ	H	12.2	3.8		7.4	B, D, E	普通		淡橙	60	ベルト内
13	坏 A Ⅵ	H	11.9	3.5		7.3	B, D, E	普通		黄褐	60	カマド前南。淡黒色土中
14	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.5		7.3	B, E	普通		淡黄橙	90	淡黒色土中
15	坏 A Ⅵ	H	12.5	3.4		7.4	B, E	普通		淡黄褐	60	カマド前北。淡黒色土中
16	坏 A Ⅵ	H	11.7	3.7		6.4	B, D, E, H	普通		淡黄褐	30	カマド前北。淡黒色土中
17	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.5		8.0	B, D, E	普通		黄褐	50	暗褐色土中
18	坏 A Ⅵ	H	12.9	3.9		6.5	B, D, E	普通		黄褐	30	ベルト中
19	坏 A Ⅴ	H	12.5	3.4		8.4	B, E, H	普通		黄褐	70	ベルト中
20	坏 A Ⅴ	H	11.8	3.3		6.2	B, D, E	普通		黄褐	60	淡黒色土中
21	坏 A Ⅴ	H	12.4	3.4		7.6	B, D, E	普通		淡黄土	50	淡黒色土中
22	坏 A Ⅵ	H	13.0	3.5		7.5	B, D, H	普通		暗黒褐	60	カマド前北。淡黒色土中
23	坏 A Ⅳ	H	13.2	3.2		8.0	B, D, E	普通		淡黄褐	30	暗褐色土中
24	坏 A Ⅴ	H	12.8	3.4		7.5	B, D, E	普通		淡黄褐	40	淡黒色土中
25	坏 A Ⅳ	H	12.4	3.2		8.5	B, D, E	普通		淡黄褐	80	淡黒色土中
26	皿	H	13.8	2.2		9.5	B, D, E	普通		淡橙	40	淡黒色土中
27	皿	H	13.4	2.5		8.4	B, D, E	普通		淡黄褐	50	淡黒色土中
28	椀	N S	12.8	4.1		6.5	B, E, I	良好	R	灰黄	30	貯穴
29	椀	N S	12.8	4.0		5.6	B	良好	R	黄灰	30	P－1
30	椀	S	13.0	5.8		3.8	B	良好	R	灰	100	No.9
31	椀	H S	13.0	3.4		5.4	B, E, G	良好	R	灰白	70	
32	椀	S	11.9	2.1		5.9	B	良好	R	褐灰	20	ベルト内
33	椀	S	12.6	3.9		5.2	B, D	良好	R	灰	30	暗褐色土層
34	椀	N S	12.1	3.8		5.3	B, E	良好	R	黄灰	50	カマド前北。淡黒色土中
35	椀	N S	12.8	3.7		5.2	B, E, I	良好	R	褐灰。灰白	50	淡黒色土中
36	椀	N S	12.1	3.5		5.8	B, E, I	普通	R	灰白	70	暗褐色土中
37	椀	N S	12.6	3.5		6.0	B	良好	R	橙	40	ベルト内。淡黒色土中
38	椀	N S	13.2	4.0		6.6	B, E, I	良好	R	灰白	70	淡黒色土中
39	椀	N S	12.9	3.4		6.4	B, E, I	良好	R	灰白	60	暗褐色土層
40	椀	H S	12.6	3.7		6.7	B, C, I	良好	R	にぶい橙	30	暗褐色土中
41	椀	H S	12.8	3.3		6.3	B, E, I	良好	L	にぶい黄橙	70	淡黒色土中
42	椀	N S	13.0	3.9		5.1	B, E, I	良好	R	灰白	95	暗褐色土中
43	椀	N S	12.4	3.9		6.0	B, I	良好	R	灰白	90	淡黒色土中
44	椀	H S	12.7	4.2		7.1	B, C, E, I	良好	R	にぶい橙	30	淡黒色土中
45	椀	N S	13.1	3.9		6.6	B, I	良好	R	灰白	80	暗黒色土中
46	椀	N S				5.9	B, E, I	良好	R	灰白。黄灰（内面の一部）	40	淡黒色土中
47	椀	黒色				5.7	B, C, E	良好	R	外－淡黄橙。内－褐灰	20	淡黒色土中
48	皿	S	12.5	2.7		5.6	B, D	良好	R	褐灰	40	淡黒色土中
49	皿	S	12.0	1.7		4.5	B, D	良好	R	灰	60	淡黒色土
50	高台付椀	H S	13.3	5.6		7.1	B	良好	R	にぶい黄橙	70	

第334表　第223号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
51	高台付椀	N S	13.9	5.2		5.8	B, E, I	良好	R	灰白	90	貯穴
52	高台付椀	H S				6.3	B, E, I	良好	R	にぶい橙	60	
53	高台付椀	N S				8.2	B	良好	R	灰白	20	
54	高台付椀	N S	24.5	11.1		9.8	B, I	良好	R	灰白	20	
55	高台付椀	S	14.4	6.2		7.8	B, C, E	良好	R	灰白	75	淡黒色土中
56	高台付椀	S	14.1	5.6		7.1	B, C, E, H	良好	R	灰	60	
57	高台付椀	S				5.6	B	良好	R	灰白	30	暗褐色土層。黒色土中
58	高台付椀	N S	12.9	5.0		6.1	B, E, G, I	良好	R	灰黄	30	暗褐色土層中。黒色土中
59	高台付椀	N S	14.2	5.5		6.0	B, I	普通	R	黄灰	40	ベルト内
60	高台付椀	N S	13.6	5.1		6.4	B, E, I	良好	R	灰黄	40	暗褐色土層
61	高台付椀	N S	13.6				B, E, G, I	良好	L	灰黄	40	暗褐色土中
62	高台付椀	N S	14.3	5.2		6.6	B, E, I	普通	R	灰白	40	暗褐色土層中
63	高台付椀	N S	13.3				B, E	良好	R	灰白	20	暗褐色土層
64	高台付椀	N S				6.8	B	良好	R	灰白	20	淡黒色土中
65	高台付椀	N S	13.8	6.0		7.6	B, D	良好	R	黄灰	35	ベルト内
66	高台付椀	N S	14.7	5.5		6.9	B, E, G	良好	R	灰白	30	淡黒色土中
67	高台付椀	H S	16.1	6.8		6.7	B, D, I	良好	R	にぶい橙	40	暗褐色土層中
68	高台付椀	N S	16.6	7.5		6.9	B, E, I	良好	R	灰白	40	淡黒色土
69	高台付椀	N S	17.6	8.3		6.9	B, E, I	良好	R	黄灰	50	ベルト内。暗褐色土層中
70	高台付椀	N S					B, E	良好	R	灰白	20	淡黒色土中
71	高台付椀	N S	23.1	11.8		8.8	B, E, I	良好	R	灰白	40	淡黒色土中
72	高台付皿	H S	13.1	2.9		7.0	B, E, I	普通	R	にぶい橙	40	暗褐色土層中
73	高台付皿	H S	11.6	2.8		5.1	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	25	黒色土
74	高台付皿	N S	11.4				B, E, G	普通	R	にぶい黄橙	50	暗褐色土層
75	椀	黒色	11.6	4.3		6.1	B, C	良好		黄褐色（内黒）	50	淡黒色土中
76	椀	黒色	11.8	4.3		5.9	B	良好	R	外－にぶい黄橙。内－黒褐	50	淡黒色土
77	椀	黒色	11.8				B, E, G	良好	R	外－にぶい黄橙。内－黒	5	カマド前北。淡黒色土中
78	輪花付高台付皿	K	13.7	3.4		6.4	B	良好	R	灰白	70	
79	高台付椀	K				13.0	B	良好	R	灰白	5	黒土
80	高台付椀	K	19.2	6.2		10.0	B	良好	R	灰白	30	ベルト内。淡黒色土中
81	高台付椀	K				7.5	B, D	良好	R	灰白	10	淡黒色土中
82	高台付皿	K	14.6	2.3		6.54	B, D	良好	R	灰白	20	暗褐色土層中
83	高台付皿	K					B	良好	R	灰白	5	淡黒色土中
84	高台付皿	K				7.6	D	良好	R	灰白	10	暗褐色土層中
85	壺	H S				2.8	B, C, I	普通	R	にぶい黄橙	5	
86	耳皿	K		1.6		4.0	F	良好		灰褐色	70	淡黒色土中
87	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
88	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
89	甕ＢⅡａ	H	19.9				B, H	良好		にぶい橙	90	
90	甕ＢⅡｃ	H	20.4				B, E, H	良好		橙		口縁－100。他－25
91	甕ＢⅡｂ	H	19.8				B, H	良好		にぶい橙	25	カマド内。カマド焼燃部
92	甕ＡⅠｂ	H	19.8				C, F, G, K	良好		橙	25	
93	甕ＡⅢｂ	H	20.9				A, B, D, E, H	良好		橙	20	カマド前北。淡黒色土中
94	甕ＡⅡｄ	H	22.0				C, E, H	良好		浅黄橙	25	暗褐色土層
95	小形甕ＢⅢａ	H	12.1				B, E, H	良好		浅黄橙	40	ベルト内
96	小形甕ＢⅢａ	H	11.2				B, E	良好		浅黄橙	25	暗褐色土層中
97	小型甕ＡⅣ	H	12.9				D, H	良好		にぶい橙	30	淡黒色土中
98	小型甕ＡⅢｅ	H	12.0				B, C, E	良好		橙	20	ベルト内
99	小形甕ＡⅢｃ	H	8.4				B, C, D, E	普通		橙	30	暗褐色土層

第335表　第223号住居跡出土遺物観察表（3）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸輪	色調	残存	出土位置その他
100	甕底部	H				3.4	B, E, H	良好		橙	80	カマド内
101	台付甕脚	H				9.4	B, E	良好		橙	25	淡黒色土
102	台付甕脚	H				9.3		良好		にぶい橙	100	淡黒色土
103	台付甕脚	H				8.2	B, E, H	良好		橙	100	淡黒色土
104	台付甕脚	H				6.6	B, D	良好		にぶい橙	70	淡黒色土中
105	壷	S					B, F, K	良好		青灰	10	暗褐色土中
106	長頸瓶	S				11.6	B	良好	R	灰	50	ベルト内
107	長頸瓶	S				15.1	B	良好	R	灰	5	淡黒色土。暗褐色土
108	長頸瓶	S	10.1				B	良好	R	灰	5	暗褐色土
109	長頸瓶	S	13.9				B, D	良好	R	灰	5	カマド前北。淡黒色土
110	長頸瓶	K	14.8				D	良好	R	灰白	50	淡黒色土中
111	長頸瓶	S					B	普通	R	灰	5	黒色土中。淡黒色土中
112	長頸瓶	K					B, D	良好		灰白	30	黒色土中
113	長頸瓶	N S				7.7	B, E	良好	R	灰白	10	
114	長頸瓶	N S				12.7	B, E, I	良好	R	灰白	5	淡黒色土。暗黒色土中
115	長頸瓶	K				7.3	B, D	良好	R	灰白	5	淡黒色土
116	大甕	S	36.4				B, G	良好		青灰	10	暗褐色土中
117	大甕	K	44.6				B	良好	R	灰黄	5	暗褐色土層中。淡黒色土
118	大甕	S	26.0				B	良好	R	灰	5	
119	大甕	S	28.4				B, G	普通		灰	10	
120	大甕	S					B, I	不良		灰	5	淡黒色土
121	大甕	S					B	普通		灰	5	
122	大甕	S					B	普通		青灰	5	

第336表　第223号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
123	橙	100	5.5	2.2	0.4	21.7	B 1	Ⅰa	67	
124	にぶい橙	100	3.5	2.3	0.2	16.2	B 1	Ⅰa	68	
125	浅黄橙	100	6.1	1.9	0.3	15.3	C 1	Ⅰa	190	
126	橙	80		1.7	0.4	8.6	C 1	Ⅱa	191	
127	橙	60		1.6	0.3	5.9	C 1	Ⅲa	192	
128	橙	100	5.4	1.3	0.3	7.2	C 2	Ⅰa	465	
129	褐灰	80		1.3	0.3	6.1	C 2	Ⅱa	466	
130	褐灰	100	4.3	1.3	0.3	7.0	C 2	Ⅰb	467	
131	橙	100	3.8	1.1	0.2	2.9	C 2	Ⅰa	502	
132	黒褐	100	3.3	1.0	0.2	2.1	C 2	Ⅰa	468	
133	にぶい褐	70		0.8	0.3	1.6	C 2	Ⅲb	469	
134	明黄褐	100	2.9	1.0	0.2	1.8	C 2	Ⅰc	470	

第224号住居跡（第396図）

N－23グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らだったが、砂利層が確認面のため、覆土中にも同様の砂利を多く含み、確認に手間取った。

住居跡の大半は、調査区外のため、形状など不明な点が多い。検出した南壁は、長さ2.92ｍ・深さ0.20ｍであった。

主軸方位は、N－93°－Eと推定した。

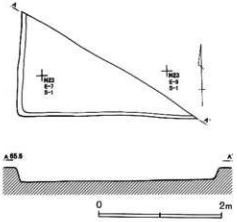
遺構の切り合いは、みられなかった。

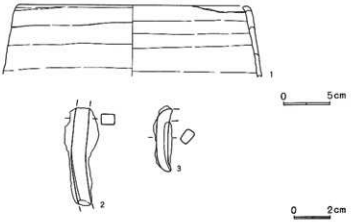
1は、釜、あるいは置きカマドである。口縁部のみである。

2・3は、鉄製品である。2は棒状鉄製品、3は鎹の先端と考えられる。

以上、出土遺物から第224号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第396図　第224号住居跡・出土遺物





第337表　第224号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	鍋？置きカマド？	H	24.3				B, E, H	良好		橙	10	

第225号住居跡（第397図）

R－24グリッドで確認した。周辺に土壙などがあったが、比較的疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.50m・短辺3.45m・深さ0.27mであった。

主軸方位は、N－18°－Eであった。

カマドは、南壁やや西寄りに造られていた。調査区内では希少例である。袖は造られず、焚き口部の両側に川原石を補強材として使用していた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、やや深く不整形に掘り込まれていた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド内から土師器の甕（7）が、カマド前面から須恵器の坏（2）が出土した。また、住居跡の北壁中央付近から須恵器の高台付椀（4）が出土した。

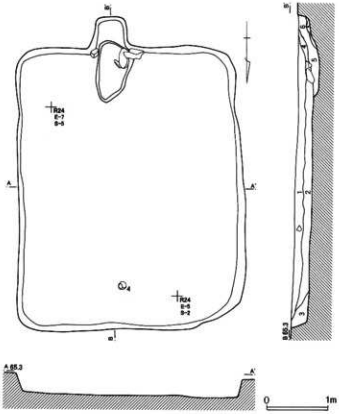
1・2は、須恵器（HS）の椀である。3・4は、須恵器（NS）の高台付椀である。3は口縁部が欠損している。1は内面全面、4は内面体部から底部にかけて黒色の付着物が確認できる。煤の痕跡と考えられる。

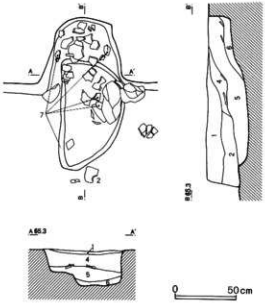
5は、灰釉陶器の高台付椀である。6は、灰釉陶器

第338表　第225号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	12.3	4.0		4.3	B, E, G	良好	R	灰黄 にぶい橙	40	
2	椀	HS	12.1	4.0		6.0	B, E, I	良好	R	にぶい橙	80	カマド
3	高台付椀	NS				6.2	B	良好	R	灰白	25	
4	高台付椀	NS	16.5	6.5		6.8	B, C, E, I	良好	R	橙，褐灰	50	
5	高台付椀	K				9.1	B	良好		灰白	15	
6	高台付皿	K				6.0	D	良好		灰白	20	
7	甕BⅢa	H	19.7				B, E	良好		橙		口縁－90，他－30，カマド
8	甕BⅢa	H	20.8				B, D	良好		浅黄橙	15	
9	甕AⅢe	H	18.5				B, C, H	良好		橙	15	
10	長頸壺	S	14.9				B, D	良好	R	灰	5	
11	大甕	S					B	普通		青灰	5	

第397図　第225号住居跡・出土遺物





第２２５号住居跡

1　暗褐色土　Ⅱ層石を多量に含み 粘性のややある暗灰褐色土を部分的に少量含む 砂質

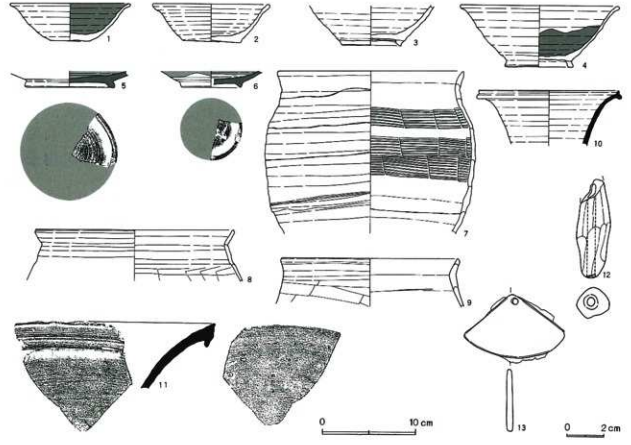
2　暗褐色土　焼土を微量含み、小石を少量含む

3　暗褐色土　砂質

4　暗茶褐色土　焼土を少量含み、炭を微量含む 砂質

5　炭黒褐色土　粒子細い 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり

6　暗灰褐色土　粘質土（カマド構築土）



の高台付皿である。5は底部のみである。6は口縁部が欠損している。

7から9は、土師器の甕である。7は胴部下位以下、8・9は胴部上位以下が欠損している。

10は、須恵器（S）の長頸壺である。口縁部のみである。

11は、須恵器（S）の大甕である。口縁部破片である。

12は、土錘である。

13は、板状鉄製品である。

以上、出土遺物から第225号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第226号住居跡（第398図・第399図）

S－24グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙群・掘立柱建物跡などの遺構が密集していた。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.56m・短辺2.90m・深さ0.34mであった。

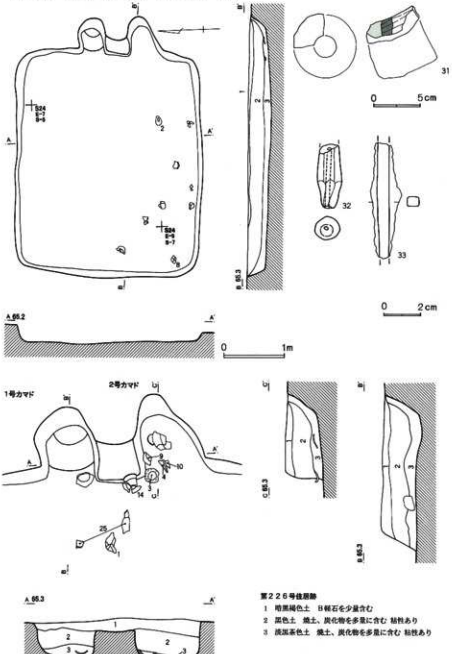
主軸方位は、N－95°－Eであった。

二基のカマドを検出した。覆土の状況から二基とも住居跡の埋没時まで共用していたと判断した。

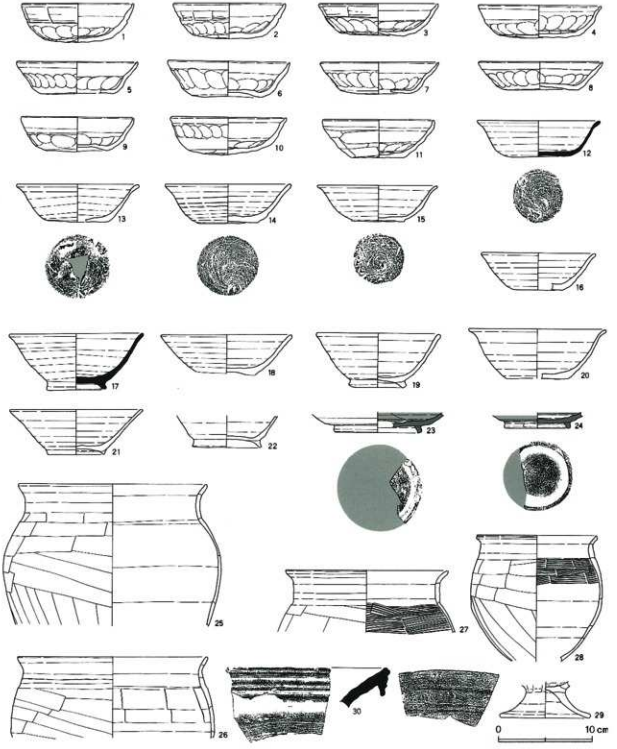
第1号カマドは、東壁のやや北寄りに検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から、住居跡内に短く延びていたと推定した。燃焼部は、奥に向かって緩やかに傾斜していた。

第2号カマドは、第1号カマドの南側に検出した。第1号カマドと同様に袖は、検出できなかったが、短く住居跡内に延びていたと推定した。燃焼部の奥は、一段低く掘り込まれていた。また2号カマドは、やや南向きに焚き口部が開いてい

第398図　第226号住居跡・出土遺物（1）



第399図　第226号住居跡出土遺物（2）



る。

遺構の切り合い関係は、第3号土壙群より新しかった。

遺物は、第2号カマド内および周辺から土師器の坏（1・3・4・9・10）、須恵器の坏（14）、土師器の甕（25）が出土した。

1から11は、土師器の坏である。4は、坏AⅡである。1・2・5・10は、坏AⅣである。3は、坏AⅤである。ほかは、坏AⅥである。11は、坏Bである。5・7は底部が欠損している。

第339表　第225号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
12	黄　橙	80		1.7	0.4	12.4	C 1	I b	193	

第340表　第226号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸薬	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.6	4.1		6.5	B, E	普通		黄橙	100	
2	坏 A Ⅳ	H	11.8	3.7		7.3	B, C, E	普通		淡橙	100	
3	坏 A Ⅴ	H	12.4	3.4		8.0	B, D, E, H	普通		淡橙	90	カマド
4	坏 A Ⅱ	H	12.9	3.5		7.0		普通		淡橙	70	カマド
5	坏 A Ⅳ	H	12.8	3.4		7.7	B, D, E	普通		淡黄褐	30	床直
6	坏 A Ⅵ	H	12.9	3.7		7.1	B, D, E	普通		淡黄橙	30	
7	坏 A Ⅵ	H	12.5	3.4		6.5	B, D, E	普通		暗黄褐	50	
8	坏 A Ⅵ	H	13.0	3.0		7.7	B, E, H	普通		黄橙	40	
9	坏 A Ⅵ	H	11.8	3.7		6.6	B, D, H	普通		淡黄橙	50	カマド
10	坏 A Ⅳ	H	12.0	4.0		7.2	B, E	不良		淡橙	100	カマド
11	坏 B Ⅱ	H	11.7	4.0		5.6	A, E	普通		淡黄橙	20	
12	椀	S	12.7	3.9		6.1	B	良好	R	褐灰	80	S－24
13	椀	H S	12.7	4.0		6.5	B, C, I	良好	R	にぶい橙	80	S－24
14	椀	N S	13.1	4.1		6.4	B	良好	R	灰白	75	カマド
15	椀	N S	12.5	4.1		5.6	B, C	良好	R	黄灰	75	
16	椀	N S	11.9	3.9		5.1	B	良好	R	灰	70	
17	高台付椀	S	14.0	5.9		5.9	B, C, F, G	良好	不明瞭	青灰	40	
18	高台付椀	H S	13.7				B, H	普通	L	にぶい橙	60	
19	高台付椀	N S	12.8	5.7		5.2	B, C, G	良好	不明瞭	灰白		底部－100。他－25。
20	高台付椀	H S	14.3				B, C	普通	不明瞭	浅黄橙	30	
21	高台付椀	N S	13.7	4.8		5.9	B	良好	R	灰白	25	S－24
22	高台付椀	H S				7.0	B, C, G	普通	不明瞭	浅黄橙	80	
23	高台付椀	K				8.7	D	良好	R	灰白	10	
24	高台付椀	K				6.6	B	良好	R	灰白	10	
25	甕 B Ⅱ a	H	19.6				B, C, E, H	普通		浅黄橙	60	カマド床直
26	甕 A Ⅲ c	H	20.0				B, C, E, H	良好		橙	25	
27	甕 B Ⅲ b	H	17.0				B, E	良好		浅黄橙	10	
28	台付甕	H	12.5				B, D, H	良好		にぶい橙		口縁－90。他－70
29	台付甕	H				9.3	B, E	良好		橙	70	
30	大甕	S					B	良好		灰	5	

第341表　第226号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
32	浅黄橙	60		1.3	0.2	5.0	C 2	Ⅱ a	472	

12から16は、椀である。12は須恵器（S）、13は須恵器（HS）、ほかは須恵器（NS）である。17から22は、高台付椀である。17は須恵器（S）、18・20・22は須恵器（HS）、ほかは須恵器（NS）である。13・16・20は底部、22は口縁部が欠損している。

23・24は、灰釉陶器の高台付椀である。底部のみである。

25から29は、土師器の甕である。25は胴部下位以下、26・27は胴部中位以下、28は底部が欠損している。29は脚部のみである。

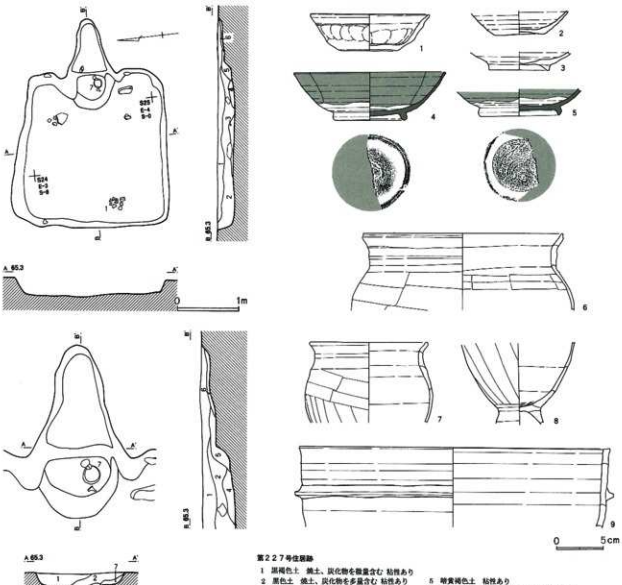
30は、須恵器（S）の甕である。口縁部破片である。

31は、羽口である。

32は、土錘である。

33は、棒状鉄製品である。

第400図　第227号住居跡・出土遺物



第227号住居跡
1 黒褐色土　焼土、炭化物を微量含む 粘性あり
2 黒色土　焼土、炭化物を多量含む 粘性あり
3 淡黒茶色土　粘質土（カマド構築土の流出）
4 暗褐色土　焼土を少量含み、砂を多量に含む
5 暗黄褐色土　粘性あり
6 暗褐色土　暗灰褐色土を少量含む 粘性あり
7 赤褐色土　地山が被熱により赤色化

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第226号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第227号住居跡（第400図）

S・T－24グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙群・掘立柱建物跡などの遺構が密集していた。

住居跡の形状は、不正長方形であった。規模は、長辺2.50m・短辺2.23m・深さ0.38mであった。

主軸方位は、N－93°－Eであった。

カマドは、東壁のやや北寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、非常に短く住居跡内に延びていた。焚き口部から燃焼部にかけては、極く浅く円形に窪んでいた。燃焼部は、奥に向かって緩やかに傾斜しており、段をもって煙道部に移行していた。

遺構の切り合い関係は、第3土壙群より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の甕（7）が、住居跡の南西隅から土師器の坏（1）が出土した。

1は、土師器の坏AⅥである。

2は、須恵器（HS）の椀である。口縁部が欠損している。

3は、須恵器（ＨＳ）の高台付椀である。底部のみである。

４・５は、灰釉陶器の高台付椀である。５は口縁部が欠損している。

６から８は、土師器の甕である。６は胴部中位以下、７は胴部下位以下が欠損している。８は底部のみである。

９は、須恵器（ＮＳ）の甑である。口縁部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第227号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第228号住居跡（第401図）

Ｓ・Ｔ－23・24グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙群・掘立柱建物跡などの遺構が密集し、また覆土が類似していたため、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.26ｍ・短辺2.52ｍ・深さ0.13ｍであった。

主軸方位は、Ｎ－98°－Ｅであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、非常に短く住居跡内に延びていた。焚き口部から燃焼部にかけては、円形の浅い掘り込みがみられた。燃焼部から煙道部へは小さな段をもって移行していた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

１・２は、須恵器（ＮＳ）の高台付椀である。２は口縁部が欠損している。

３は、灰釉陶器の高台付椀である。底部のみである。

４は、須恵器（ＮＳ）の耳皿である。

５・６は、土師器の甕である。７は、須恵器（ＨＳ）の甕である。８は、須恵器（Ｓ）の甕である。５は胴部中位以下、７は胴部中位が欠損している。６は脚部のみである。８は口縁部破片である。

９から12は、鉄製品である。９は釘、10は方形金具と棒状鉄製品が付着したもの、11は不明鉄製品、12は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物から第228号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

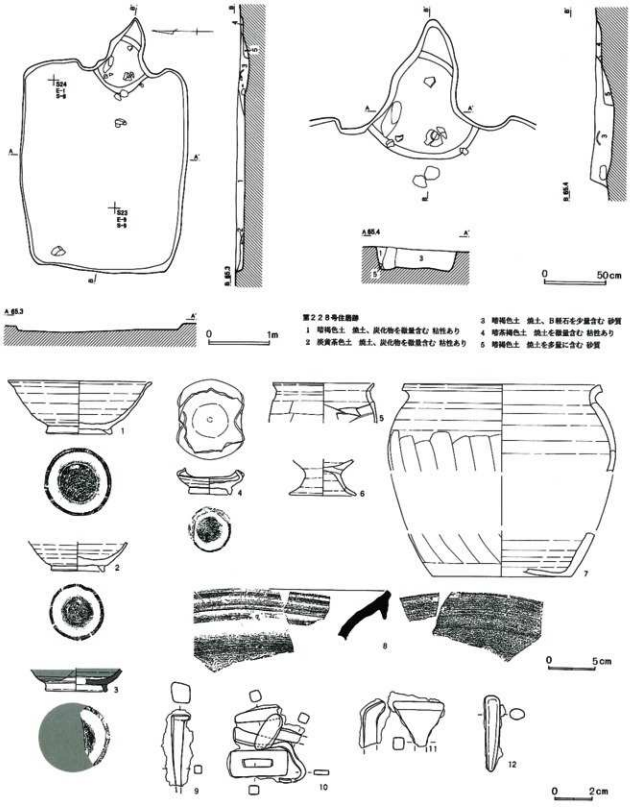
第342表　第227号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	12.6	3.9		6.2	B, D, H	普通		黒灰	80	
2	椀	HS				5.2	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	30	カマド
3	高台付椀	HS				6.2	B, E, I	普通	R	灰黄	20	
4	高台付椀	K	16.0	5.1		7.3	B, D	良好	R	灰白	40	
5	高台付椀	K				8.3	D	良好	R	灰白	60	カマド
6	甕 B Ⅲ c	H	21.0				B, E	良好		橙		口縁－25。他－5。カマド
7	台付甕	H	12.3				B, C, E, H	良好		橙		口縁－100。他－60
8	台付甕	H					A, B, H	普通		浅黄橙	80	カマド
9	甑 B Ⅱ	NS	32.9				B, C	良好		灰白	5	

第343表　第228号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS	15.0	5.6		6.4	B, D, I	良好	R	灰白	70	
2	高台付椀	NS				5.5	B, E, I	普通	R	灰白	30	
3	高台付椀	K				6.0	B	良好	R	灰白	10	
4	耳皿	NS		1.7		4.3	B, D	良好		淡灰	70	
5	台付甕	H	10.6				B, H, I	良好		橙	15	
6	台付甕脚部	H				6.8	B, D, E, K	良好		にぶい橙	50	
7	ロクロ甕	HS	20.7	20.0		14.5	B, E, H	不良		灰（胴下部－浅黄橙）	30	
8	大甕	S					B	良好	R	灰	5	

第401図　第228号住居跡・出土遺物



第228号住居跡
1　暗褐色土　焼土、炭化物を微量含む 粘性あり
2　灰黄茶色土　焼土、炭化物を微量含む 粘性あり
3　暗褐色土　焼土、B軽石を少量含む 砂質
4　暗茶褐色土　焼土を微量含む 粘性あり
5　暗褐色土　焼土を多量に含む 砂質

第229号住居跡（第402図・第403図）

U－23グリッドで確認した。周辺は、土壙群などの遺構がみられたが、比較的疎らであった。二軒の住居跡の重複と当初判断したが、断面観察によって、同じ場所に第229A号住居跡から第229B号住居跡へ建て替えと判断した。

第229A号住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.87m・短辺3.82m・深さ0.35mであった。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、北東隅に検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から、短く住居跡内に延びていたと推定した。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。煙道部は短く、煙り出し部は垂直に立ち上がっていた。

第229B号住居の形状は、方形であった。規模は、長径3.45m・短径3.35m・深さ0.35mであった。東壁を除き、幅0.2mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－93°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内に短く延びていた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、楕円形に深く掘り込まれていた。燃焼部から煙道部へは大きな段をもって移行していた。

貯蔵穴は、カマド右脇に検出した。形状は、不正円形で規模は、長径1.0m・短径0.81m・深さ0.11mであった。

遺構の切り合い関係は、第4土壙群より新しかった。

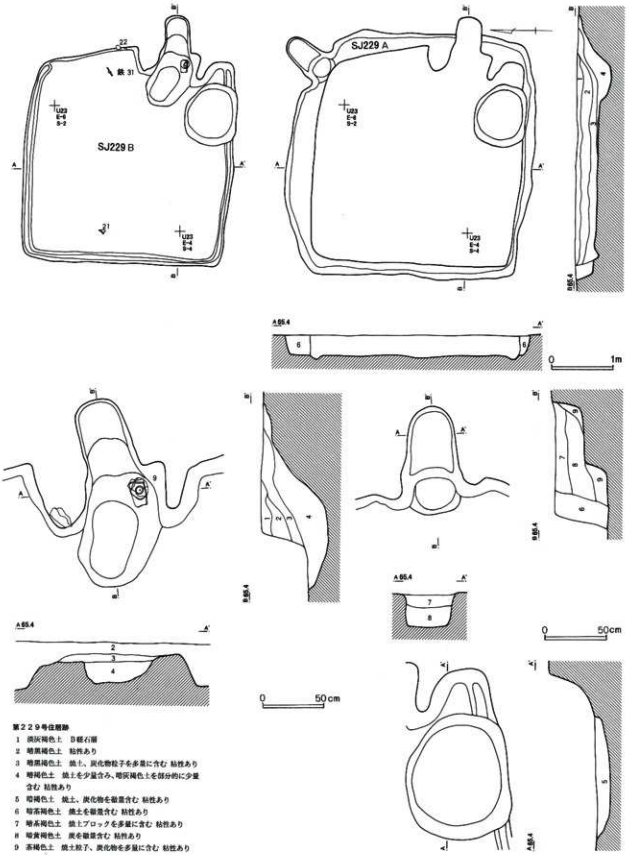
遺物は、第229B号住居跡カマド内から須恵器の高台付椀（9）、第229B号住居跡のカマド左脇から土師器の甕（22）、鉄製紡錘車（31）が出土した。

1・2は、須恵器（NS）の椀である。3から13は、高台付椀である。3から5は、須恵器（S）である。

第344表　第229号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	NS	13.1	3.5		7.0	B, E, I	良好	R	橙	30	
2	椀	NS	13.1	4.2		6.2	B, E	良好	R	灰白	50	
3	高台付椀	S	13.4	5.8		6.1	B	良好	R	灰	40	
4	高台付椀	S	13.7	5.5		6.4	B	良好	R	灰褐	50	
5	高台付椀	S				6.7	B, D	良好	R	灰	30	
6	高台付椀	NS	13.2	5.0		6.4	B	良好	R	灰白	40	
7	高台付椀	NS	13.0	4.7		6.0	B, C, E, I	良好	R	灰白	50	
8	高台付椀	HS	14.0	5.6		6.4	B, C, I	良好	R	内－灰黄。外－にぶい橙	70	
9	高台付椀	HS	14.4	4.7		5.9	B, E, I	良好	R	灰黄褐	95	カマド
10	高台付椀	NS	15.3	6.4		6.6	B, D	良好	R	灰	50	
11	高台付椀	NS				7.6	B, C	良好	R	灰黄褐	30	
12	高台付椀	NS				6.1	B, E, I	普通	R	灰黄	30	
13	高台付椀	NS				6.8	B	普通	R	灰白	20	
14	皿	S	12.6	2.5		6.2	B, C, E, I	良好	R	灰褐	50	
15	皿	S	12.5	2.2		5.7	B, D	良好	R	灰	75	
16	皿	S	12.4	2.3		4.5	B	良好	R	灰	30	
17	皿	S	13.4	1.8		5.0	B, D	良好	R	黄灰	30	
18	高台付椀	K	16.8	4.6		7.2	B	良好	R	灰白	30	
19	高台付椀	K				6.3	B, D	良好	R	灰白	50	
20	高台付皿	K				6.6	B, D	良好	R	灰白	10	
21	甕 B Ⅲ a	H	19.9				B, D, E	良好		橙	20	
22	甕 A Ⅲ e	H	11.1				B, C, H	良好		にぶい橙	20	
23	台付甕	H				8.7	B, E, H	良好		橙	40	
24	長頸瓶	HS				8.1	B, C, E	普通		浅黄橙	90	
25	長頸瓶	K					B, D	良好		淡灰白	10	
26	甕	S	23.8				B	良好	R	灰	5	

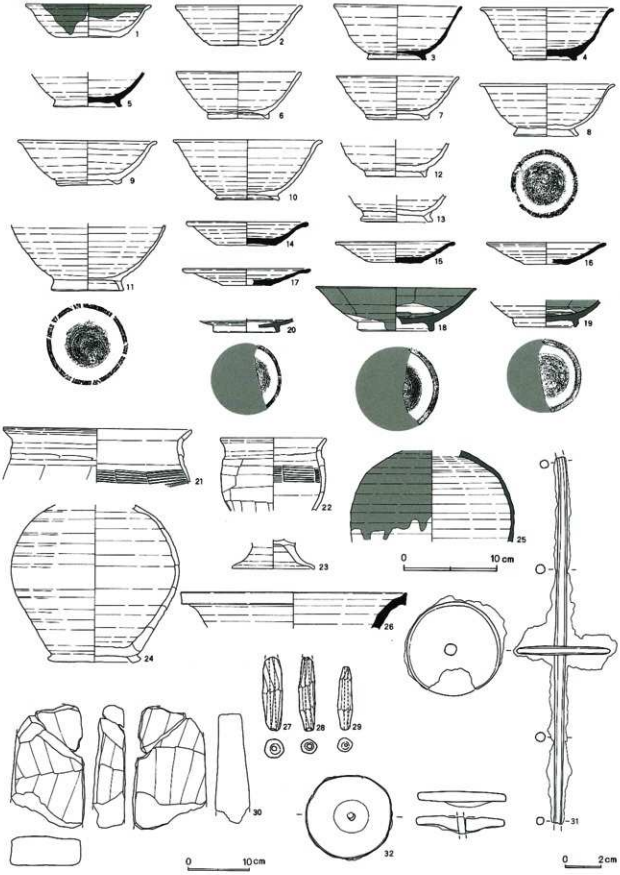
第402図　第229号住居跡



第229号住居跡

1　褐灰褐色土　φ礫石層
2　暗黒褐色土　粘性あり
3　暗黒褐色土　焼土、炭化物粒子を多量に含む 粘性あり
4　暗褐色土　焼土を少量含み、暗灰褐色土を部分的に少量含む 粘性あり
5　暗褐色土　焼土、炭化物を微量含む 粘性あり
6　暗茶褐色土　焼土を微量含む 粘性あり
7　暗茶褐色土　焼土ブロックを多量に含む 粘性あり
8　暗黄褐色土　炭を微量含む 粘性あり
9　茶褐色土　焼土粒子、炭化物を多量に含む 粘性あり

第403図　第229号住居跡出土遺物



8・9は、須恵器（HS）である。ほかは須恵器（NS）である。14から17は、須恵器（S）の皿である。2・16・17は底部、5・11から13は口縁部が欠損している。1は黒色の付着物が口縁部に確認できる。油煙と考えられる。9は黒色の付着物が内面体部から底部にかけて確認できる。漆の痕跡と考えられる。

18・19は、灰釉陶器の高台付椀である。20は、灰釉陶器の皿である。18は底部、19は口縁部が欠損している。20は底部のみである。

21から23は、土師器の甕である。21は胴部中位以下、22は胴部下位以下が欠損している。23は脚部のみである。

24は、須恵器（HS）の長頸壺である。25は、灰釉陶器の長頸壺である。26は、須恵器（S）の甕である。24は口縁部、25は口縁部と胴部下位以下が欠損している。26は口縁部のみである。

27から29は、土錘である。

30は、凝灰岩の切石である。

31・32は、紡錘車である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第229号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第230号住居跡（第404図）

U－23グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集し、また砂利層が確認面であったため、確認作業が困難であった。

住居跡の南東部分は、第231号住居跡が破壊したが、ほぼ全容を検出した。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.48m・短辺2.3m・深さ0.10mであった。南壁とカマド部分を除き幅0.2m～0.3mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－8°－Eであった。

カマドは、北壁の北東寄に検出した。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内に非常に短く延びていたが、燃焼部の位置から、さらに長く延びていたと推定した。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、浅く楕円形に掘り込まれていた。燃焼部は、さらに深く楕円形に掘り込まれていた。燃焼部から煙道部へは、小さな段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第231号住居跡より古かった。

遺物は、カマド右側から土師器の坏（1）、須恵器の高台付椀（4）が出土し、カマド右脇から須恵器の坏（2）が出土した。

1は、土師器の坏AⅣである。

2は、須恵器（NS）の椀である。

第345表　第229号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
27	黄橙	80		1.0	0.3	3.5	C2	Ⅱa	473	
28	黄橙	100	3.9	0.8	0.3	2.3	C2	Ⅱa	474	
29	黄橙	100	3.4	0.8	0.2	1.2	C2	Ⅰa	475	

第346表　第230号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.0	3.7		7.2	B, E, H	普通		黄褐	40	
2	椀	NS	13.1	3.4		7.0	B	普通	R	灰白	90	
3	高台付椀	HS				5.9	B, I	良好	R	にぶい橙	30	
4	高台付椀	NS	14.3	5.8		7.2	B, C, I	良好	R	灰黄	90	
5	高台付椀	HS	19.6				B, E, G	普通	R	浅黄橙	10	
6	甕 B Ⅲ a	H	18.3				B, C, E, H	良好		橙	10	
7	鉄鉢	S	17.2				B, F, G	不良		淡白	20	

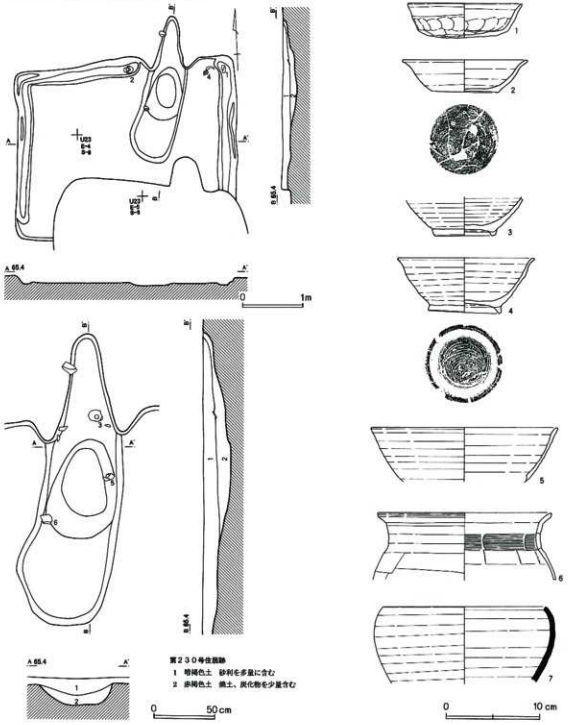
3から5は、高台付椀である。4は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。3は口縁部、5は底部が欠損している。

6は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

7は、須恵器（S）の鉢である。底部が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第230号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第404図　第230号住居跡・出土遺物



第231号住居跡（第405図）

U・V－23グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集し、また砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

住居跡の形状は、南東部の大きく張った不正長方形であった。規模は、長辺3.17ｍ・短辺3.20ｍ・深さ0.19ｍであった。

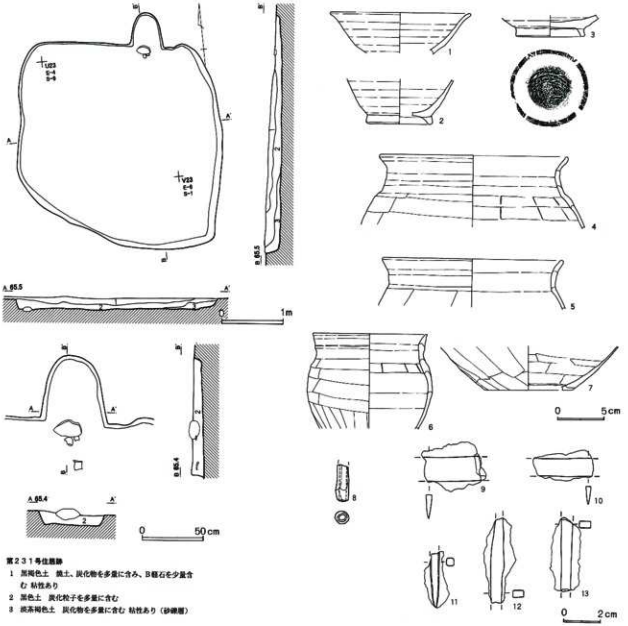
主軸方位は、N－1°－Wであった。

カマドは、北壁の北東寄りに検出した。残存状況が悪く、不明な点が多い。袖は、検出できなかった。燃焼部の掘り込みはみられず、奥に向かって緩やかに傾斜していた。燃焼部から川原石が出土した。構築材であろう。

遺構の切り合い関係は、第230号住居跡より新しかった。

1から3は、高台付椀である。1は、須恵器（NS）、ほかは須恵器（HS）である。1は底部、2は口縁部と底部が欠損している。3は底部のみである。

第405図　第231号住居跡・出土遺物



第231号住居跡
1　黒褐色土　焼土、炭化物を多量に含み、B軽石を少量含む　粘性あり
2　黒色土　炭化粒子を多量に含む
3　暗茶褐色土　炭化物を多量に含む　粘性あり（砂礫層）

4から6は、土師器の甕である。7は、土師器の壷である。4・5は胴部中位以下、6は胴部下位以下が欠損している。7は底部のみである。

8は、土錘である。

9から13は、鉄製品である。9・10は刀子（刃部片）、11は釘脚部、12・13は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第231号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第232号住居跡（第406図）

V－23グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集し、また砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.80m・短辺3.05m・深さ0.13mであった。

主軸方位は、N－4°－Eであった。

カマドは、北壁のやや東寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造り、住居跡内に短く延びていた。焚き口部から燃焼部にかけては、楕円形に深く掘り込まれていた。この掘り込みの覆土に、焼土・炭化物が多量に含まれていたことから、掘り込まれたままで使用していたと判断した。燃焼部から煙道部へは、小さな段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第233号住居跡より古かった。

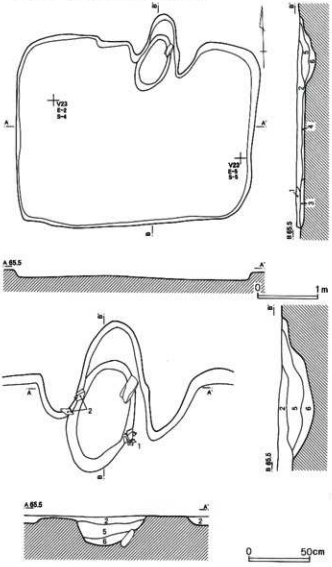
遺物は、カマド内から土師器の坏（1）、土師器の甕（2）が出土した。

1は、土師器の坏AⅣである。

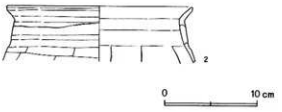
2は、土師器の甕である。胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から

第406図　第232号住居跡・出土遺物



第232号住居跡
1　暗褐色土　焼土を多量に含み、砂利を少量含む 砂質
2　暗茶褐色土　焼土を微量含む 粘性あり
3　暗褐色土　砂利主体
4　暗褐色土　焼土を微量含む 砂質
5　赤褐色土　焼土層 粘性あり
6　黒色土　炭化物、粘土を多量に含む



第232号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第233号住居跡（第407図）

Ⅴ－23グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集し、また砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

住居跡の形状は、不正長方形であった。規模は、長辺3.74ｍ・短辺1.80ｍで、深さは0.06ｍと浅かった。カマドの構造など不明な点が多かった。

主軸方位は、N－4°－Eであった。

カマドは、北壁の北西寄りに検出した。袖は、検出できなかった。燃焼部は浅く楕円形に窪んでいた。

遺構の切り合い関係は、第232号住居跡より新しかった。

図示できるほどの遺物が出土しなかった。

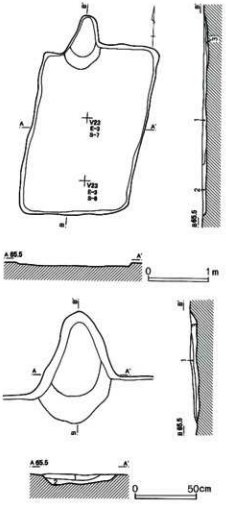
以上、遺構の重複関係等から第233号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第234号住居跡（第408図）

Ⅴ－23グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集し、また砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

住居跡の形状は、南西隅の小さく張る方形であった。規模は、長辺2.65ｍ・短辺2.48ｍ・深さ0.21ｍであった。

第407図　第233号住居跡



第２３３号住居跡
1　黒褐色土　焼土、炭化物、B軽石を少量含む 粘性あり
2　灰褐色土　砂礫層
3　灰赤黒色土　粒子粗い 焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり

第347表　第231号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS	14.7				B	良好	R	黄灰	20	
2	高台付椀	HS				6.3	B, C, E, R	良好	R	橙	10	
3	高台付椀	HS				6.8	B, E	良好	R	にぶい橙	20	
4	甕 B Ⅲ a	H	19.8				B, C, H	普通		浅黄橙	15	
5	甕 A Ⅲ b	H	18.8				B, E, H	良好		橙	20	
6	台付甕	H	12.8				B, C	普通		外－赤橙。内－浅黄橙		口縁－90。他－60
7	壺	H				9.2	B, C	良好		橙	20	

第348表　第231号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
8	にぶい橙	30		0.7	0.3	0.7	C 3	Ⅰb	651	

主軸方位は、N－85°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は検出できなかった。燃焼部は、円形に深く掘り込み、覆土に、多量の焼土・炭化物を含んでいた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1は、土師器の坏AⅣである。2は、土師器の坏BⅡである。1は底部が欠損している。

3から7は、高台付椀である。4・6は、須恵器（HS）である。ほかは須恵器（NS）である。4は高台、5は底部が欠損している。6・7は底部のみである。

8は、須恵器（S）の長頸壺である。9は、須恵器（S）の甕である。8は底部のみである。9は胴部中位以下が欠損している。

10は、土錘である。

11から13は、鉄製品である。11・12は鉄鏃、13は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物から第234号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第235号住居跡（第409図・第410図）

V－24グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集し、また砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.45m・短辺3.73m・深さ0.30mであった。

主軸方位は、N－92°－Eであった。

カマドは、東壁に二基並んで検出した。覆土の堆積状況から、二基のカマドとも、住居跡の埋没時まで共用していたと判断した。

第1号カマドは、東壁のやや北寄りに造られていた。袖は、検出できなかった。焚き口部の左側に補強材の抜取り痕跡がみられることから、左袖は造られなかったと判断した。第2号カマドと共有した右袖は、燃焼部の位置から、短く造り付けていたと推定した。燃焼部は、円形に浅く窪んでいた。

第2号カマドは第1号カマドの南側に造られた。袖は、検出できなかったが、住居跡内に短く延びていたと推定した。焚き口部の前面には、径0.31mの円形の掘り込みを検出し、多量の焼土を出土した。燃焼部は、楕円形に掘り込まれていた。燃焼部から煙道部には段をもって移行していた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

第349表　第232号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸幅	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.3		6.3	D, E, H	普通		黄橙	60	カマド
2	甕 B Ⅲ a	H	19.7				B, E, H	良好		橙	15	カマド

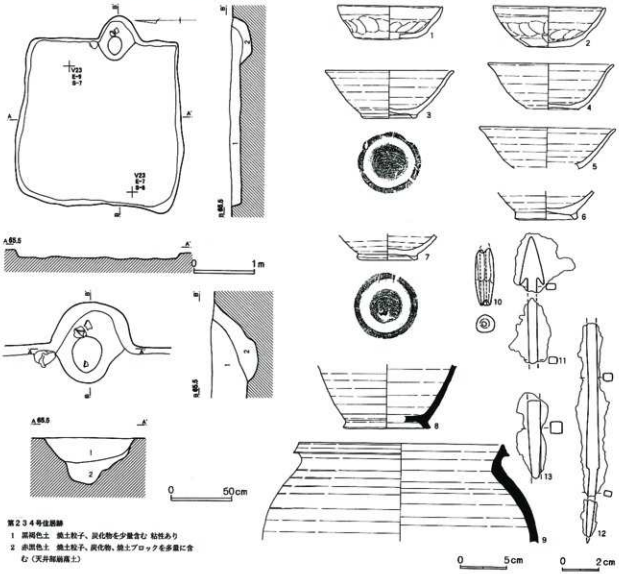
第350表　第234号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸幅	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.1	3.6		6.1	B, D, E, H	普通		淡赤橙	90	
2	坏 B Ⅱ	H	11.9	4.3		4.8	B, E, H	普通		暗橙	40	
3	高台付椀	N S	13.5	5.1		5.1	B, E, I	良好	R	褐灰	40	
4	高台付椀	H S	13.2				B, C	良好	R	にぶい黄橙	60	
5	高台付椀	N S	14.3				B, I	良好	R	灰白	40	
6	高台付椀	H S				6.0	B, C, F, G, H	普通		灰黄	80	
7	高台付椀	N S				5.7	B, E, I	普通	R	灰黄	20	
8	長頸壺	S				8.5	B	良好	R	灰	10	
9	壺	S	21.8				B, D	良好		灰白	20	

第351表　第234号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
10	浅黄橙	70		1.0	0.3	1.9	C 2	I c	476	

第408図　第234号住居跡・出土遺物



遺物は、第1号カマドから土師器の甕（11）が、第2号カマドから須恵器の坏（2）、土師器の甕（10・13）が出土した。また、第2号カマドの右脇の住居跡の南東隅から須恵器の坏（3）・高台付椀（4・6・7）、土師器の甕（12）が出土した。

1は、土師器の坏AⅣである。2・3は、椀である。2は須恵器（S）、3は須恵器（HS）である。

4から7は、高台付椀である。5は須恵器（S）、7は須恵器（HS）、ほかは須恵器（NS）である。5は底部、6・7は口縁部が欠損している。

8は、灰釉陶器の高台付椀である。口縁部が欠損している。

9は、須恵器（S）の高台付皿である。

10から13は、土師器の甕である。11・12は胴部中位以下、13は胴部上位以上と脚部が欠損している。

14・15は、灰釉陶器の長頸壺である。14は口縁部のみ、15は頸部のみである。

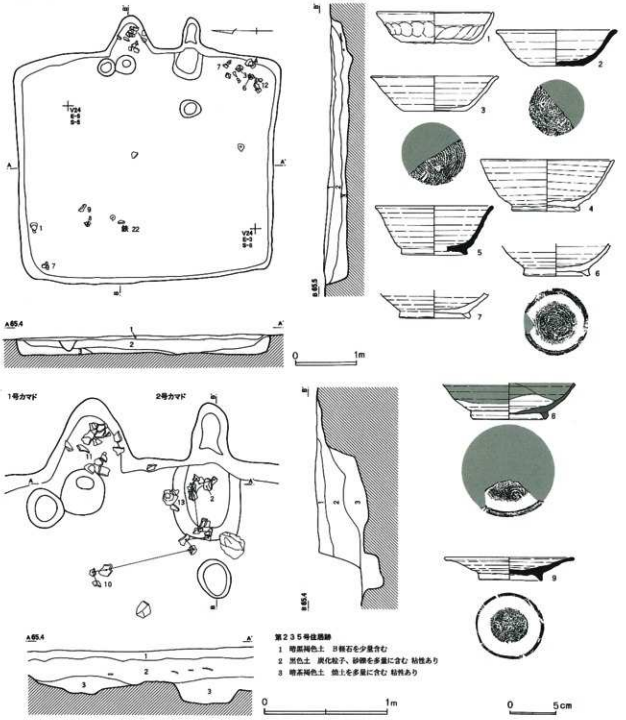
16は、須恵器（HS）の甕である。口縁部のみである。

17から21は、土錘である。

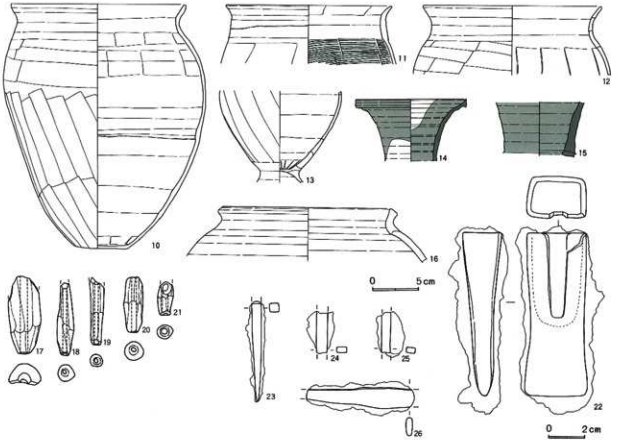
22から26は、鉄製品である。22は鉄斧、23は釘、24・25は棒状鉄製品、26は延板状鉄製品である。

以上、出土遺物から第235号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第409図　第235号住居跡・出土遺物（1）



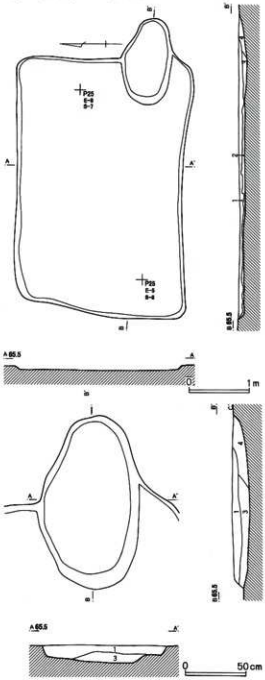
第410図　第235号住居跡出土遺物（2）



第352表　第235号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪鍵	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.3	3.4		7.4	B, D, E	普通		黄橙	70	
2	椀	S	12.6	3.9		5.9	B, D	良好	R	灰	50	カマド
3	椀	H S	13.2	3.3		6.5	B, C, E, G	良好	R	にぶい黄	30	カマド
4	高台付椀	N S	14.0	5.6		6.9	B, E, I	良好	R	灰白	80	カマド
5	高台付椀	S	12.3	5.3		6.5	B, C	良好	R	灰	25	
6	高台付椀	N S				6.8	B, D, G	良好	R	灰白	100	カマド
7	高台付椀	H S				7.4	B, F, G	普通	R	浅黄橙	100	
8	高台付椀	K				7.6	B, D	良好	R	灰白	10	
9	高台付皿	S	13.6	2.5		6.5	B	良好	R	灰	75	
10	甕 A Ⅲ b	H	18.6	25.7		5.5	B, E	良好		橙	80	カマド
11	甕 B Ⅲ a	H	17.6				B, C, E	良好		浅黄橙	25	カマド
12	甕 A Ⅲ b	H	18.8				B, H	良好		浅黄橙	30	カマド
13	台付甕	H					B, C, E	良好		橙	80	カマド
14	長頸壺	K	11.3				B	良好	R	灰白	5	
15	長頸壺	K					B	良好	R	灰白	5	
16	甕	H S	17.9				B, C, H	普通		にぶい橙	5	

第411図　第236号住居跡



第２３６号住居跡
1　暗褐色土　焼土を微量含み、大形礫を多量に含む　粘性あり
2　暗黄褐色土　部分的に砂利主体の暗灰褐色土を含む
3　暗黄褐色土　焼土、炭を微量含む　砂質
4　暗黄褐色土　白色粒子を少量含む

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.04m・短辺2.65m・深さ0.10mと非常に浅かった。カマドの構造など不明な点が多かった。

主軸方位は、N－95°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、検出できなかった。焚き口部から燃焼部にかけては、楕円形に浅く掘り込まれていた。

遺構の切り合い関係は第680号土壙より新しかった。

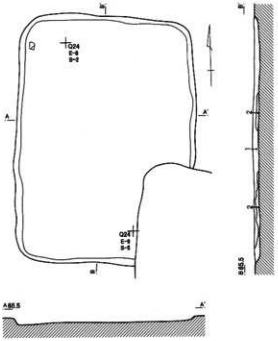
図示できるほどの遺物は出土していない。

以上、遺構の重複関係等から第236号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第236号住居跡（第411図）

P－25グリッドで確認した。周辺の遺構は、住居跡・土壙・掘立柱建物跡などが比較的密集していた。また砂利層が確認面であったため、確認作業に手間取った。

第412図　第237号住居跡・出土遺物



第２３７号住居跡
1　暗褐色土　焼土粒子、炭化物を多量に含む　粘性あり
2　灰褐色土　焼土、炭化物を微量含み、礫を多量に含む

第353表　第235号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
17	橙	40		1.7		6.3	C 1	Ⅶ	194	
18	浅黄橙	100	3.6	0.9	0.2	2.1	C 2	Ⅰb	477	
19	灰黄	80				1.2	C 3	Ⅱa	648	
20	灰黄	100	2.9	1.0	0.3	2.2	C 3	Ⅰb	649	
21	橙	10				0.7	C 3	Ⅲb	650	

第354表　第237号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	椀	NS				6.6	B, E, G	良好		灰白	5	

第237号住居跡（第412図）

Q－24グリッドで確認した。周辺の遺構は、住居跡・土壙・掘立柱建物跡などが比較的密集していた。また砂利層が確認面であったため、確認作業に手間取った。

住居跡の南東隅を第238号住居跡が破壊していた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.93m・短辺2.87m・深さは0.10mと非常に浅かった。

主軸方位は、N－4°－Eであった。

南東隅にカマドが造られていたと推定したが、第238号住居跡によってカマドの痕跡すら明らかにできなかった。

遺構の切り合い関係は、第238号住居跡より古かった。

1は、須恵器（HS）の椀である。底部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第237号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第238号住居跡（第413図）

Q－24・25グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・掘立柱建物跡など比較的密集していた。また砂利層が確認面であったため、確認作業に手間取った。

住居跡の南壁を第29号区画溝が破壊したため、全容は不明であった。

住居跡の形状は、不正長方形であった。残存する北壁の長さは、3.20m・深さ0.19mであった。住居跡の北東隅から北西隅にかけ幅0.36m、床面から高さ0.12mの段を検出した。

主軸方位は、N－98°－Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、検出できなかった。燃焼部は、円形に浅く掘り込まれていた。

遺構の切り合い関係は、第29号区画溝より古く、第237号住居跡より新しかった。

遺物は、住居跡の南壁中央から灰釉陶器の高台付椀（1）が出土した。

1・2は、灰釉陶器の高台付椀である。底部のみである。

3は、灰釉陶器の長頸壺である。胴部上位のみである。

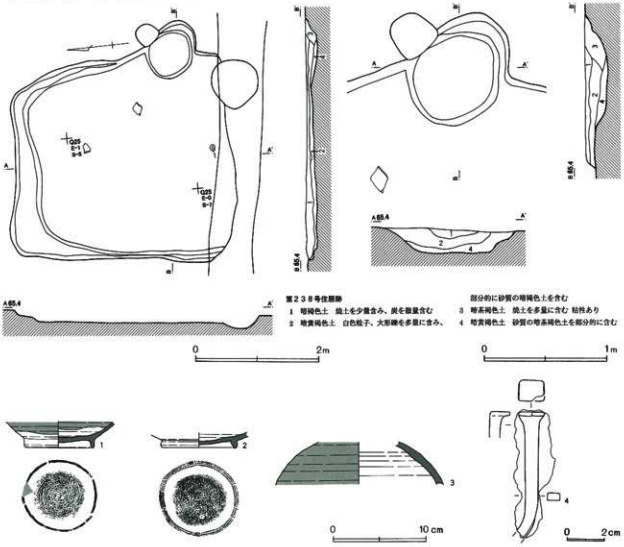
4は、鉄製の釘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第238号竪

第355表　第238号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	K				7.0	B	良好		淡灰白	20	
2	高台付椀	K				7.5	B, D	良好	R	灰白	100	
3	長頸壺	K					D	良好		外－オリーブ灰。内－灰白	20	

第413図　第238号住居跡・出土遺物



穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第239号住居跡（第414図）

Q・R－25グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・掘立柱建物跡など比較的密集していた。また砂利層が確認面であったため、確認作業に手間取った。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.51m・短辺2.25m・深さ0.06mと非常に浅かった。北壁から西壁にかけては、幅0.35mの段を検出した。また住居跡の中央は深さ0.08mほど不整形に大きく掘り込まれていた。住居跡の南西隅に小穴を二基検出した。

主軸方位は、N－95°－Eであった。

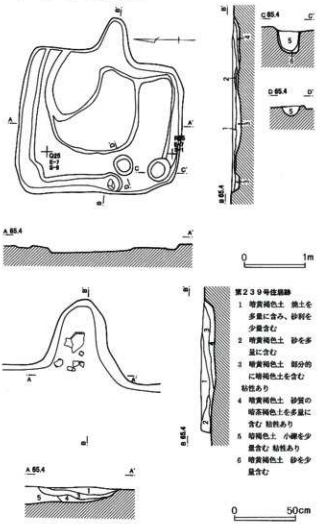
カマドは、東壁のほぼ中央で検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から、短く住居跡へ延びていたと推定した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

図示できるほどの遺物は、出土しなかった。

以上から第206号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第414図　第239号住居跡



第240号住居跡（第415図・第416図）

R－25グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・掘立柱建物跡など比較的密集していた。また砂利層が確認面であったため確認作業に手間取った。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.45ｍ・短辺3.06ｍ・深さ0.25ｍであった。貯蔵穴を除いて幅0.32ｍの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－2°－Eであった。

カマドは、北壁の東寄りに検出した。袖は、検出できず、当初から造らなかったと判断した。燃焼部は、不正方形で底面は、浅く窪んでいた。燃焼部から煙道部に段をもって移行していた。

貯蔵穴は、カマド右脇の北東隅に検出した。形状は、不正楕円形で規模は、長径1.05ｍ・短径0.58ｍ・深さ0.25ｍであった。

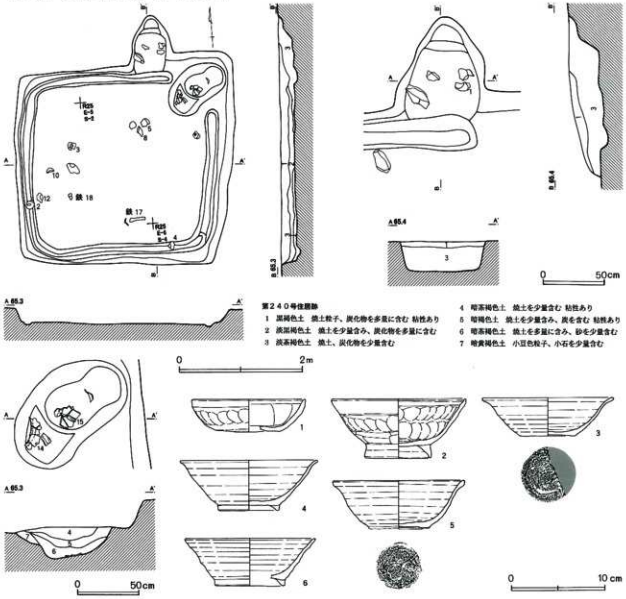
遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド内から土師器の坏（1）出土し、貯蔵穴内から土師器の甕（14・15）が出土した。また、住居跡の中央から須恵器の坏（5）・高台付皿（8）が、住居中央北側から須恵器の高台付椀（2）・坏（3）、灰釉陶器の高台付椀

第356表　第240号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鐙	底径	胎土	焼成	釉薬	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.9	3.5		6.7	B, E	普通		明橙	90	カマド
2	高台付坏	H	14.1	6.3		6.9	B, D, E	普通		赤褐	90	砂
3	椀	N S	13.6	4.0		5.9	B, C	良好	R	灰黄	60	
4	高台付椀	N S	14.4	5.3		6.0	B, C, E	普通	R	にぶい橙	30	
5	高台付椀	N S	13.9				B, C	良好	R	黄灰	80	
6	高台付椀	N S	13.6	5.0		7.0	B	普通	R	灰白	25	
7	高台付椀	N S	13.5	5.2		5.5	B, C	良好		黄灰	50	
8	高台付皿	H S	13.4	3.0		5.9	B, E, G	良好	R	灰黄	75	
9	高台付椀	K	15.6	5.3		7.8	B, D	良好	R	灰白	10	
10	高台付椀	K				6.0	B, D	良好	R	灰白	10	
11	高台付皿	K	14.7	3.4		7.0	B, D	良好	R	灰白	40	
12	高台付皿	K	14.5	2.9		7.1	B	良好	R	灰白。浅黄（釉）	75	
13	高台付皿	K	13.8	2.4		6.1	B, D	良好	R	灰白	20	
14	甕 B Ⅲ a	H	18.6				B, E	良好		にぶい橙		口縁－100。他－15。カマド
15	甕 Ⅳ b	H	20.4				B, H	良好		橙	20	貯穴

第415図　第240号住居跡・出土遺物（1）



(10)、鉄釘（18）が出土し、住居跡の西壁の南寄りから須恵器の高台付椀（4）、鉄製品（17）が出土した。

1は、土師器の坏AⅥである。2は、土師器の高台付坏である。1は底部が欠損している。

3は、須恵器（NS）の椀である。4から7は、須恵器（NS）の高台付椀である。8は須恵器（HS）の高台付皿である。6は底部が欠損している。

9・10は、灰釉陶器の高台付椀である。11から13は、灰釉陶器の高台付皿である。9・11は底部、10は口縁部と底部が欠損している。

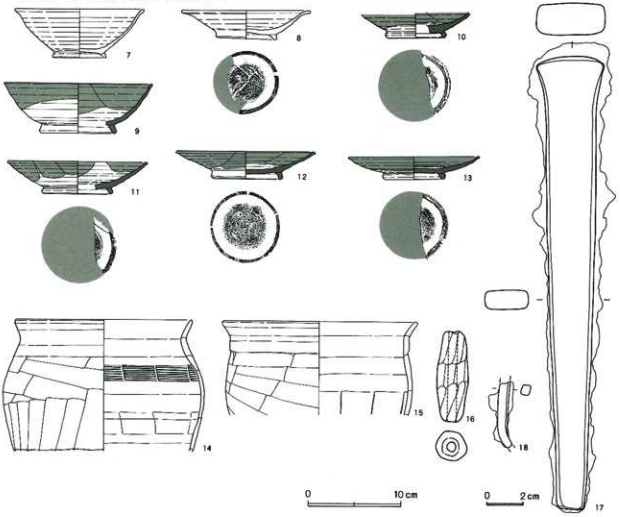
14・15は、土師器の甕である。胴部下位以下が欠損している。

16は、土錘である。

17・18は、鉄製品である。17は鏃と考えられる鉄製品、18は釘の破片である。

以上、出土遺物から第240号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第416図　第240号住居跡出土遺物（２）



第241号住居跡（第417図）

Q・R－26グリッドで確認した。周辺の遺構は、掘立柱建物跡・溝など比較的疎らだったが、砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.12m・短辺3.65m・深さ0.38mであった。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、東壁やや南寄りに検出した。カマドは、第29号区画溝と重複していた。しかし、住居跡の掘り込みが深く、カマドの構造は把握できた。袖は検出できず、当初から造らなかったと判断した。焚き口部の両脇には、川原石、凝灰岩の切石を補強材として使用していた。燃焼部底面に小さな凹凸があり、掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合い関係は、第29号区画溝より古かった。

遺物は、カマド左脇の壁際から須恵器の長頸壺（８）が出土し、住居跡の南西隅から須恵器の片口鉢が出土した。

１は、土師器の坏AⅥである。

２は、須恵器（NS）の高台付椀である。

第357表　第240号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
16	浅黄橙	100	4.8	1.6	0.6	11.2	C1	Ia	195	